

## Namo tassa Bhagavato arahato sammāsambuddhassa

正自覚者であり 阿羅漢である かの世尊に礼拝いたします

はじめに

釈尊の教えを経 *suttanta*、律 *vinaya*、論 *Abhidhamma* と三蔵に分ける中、経は教えを聞く人の能力・素質に応じてとかれた対機説法、簡単な教えから次第に深い内容を説いていく次第説法などであり、律は仏弟子である比丘・出家者の生活規則・戒律であるが、論は仏教教理を体系的に叙述したものである。伝統的な註釈によると釈尊が一切智を得て7年目の雨安居に入られる日に三十三天 *tāvātimsā*において実母・マーヤ夫人であった都率天の天子を主として神々や梵天に三ヶ月の間休むことなく連続で説かれたものである。

論は法集論 *Dhammasaṅgaṇī*、分別論 *Vibhaṅga*、界論 *Dhātukathā*、人施設説 *Puggalapaññatti*、論事 *Kathāvatthu*、双論 *Yamaka*、発趣論 *Paṭṭhāna* と七種あり、その註釈は法集論註 *Atthasālinī*、分別論註 *Sammohavinodanī*、界論・人施設論・論事・双論・発趣論註 *Pañca-pakarāṇa-aṭṭhakathā* とある。これらのパーリ論蔵を学ぶ者の入門書としてテーラワーダ仏教国で使用されているものがこのアビダンマッタサンガハである。小指の厚さの注釈書と呼ばれている程のものであるがビルマのレーディーサヤドー（1846～1923）によるとこれを学べば経、論の基礎を網羅したといわれる程奥が深いものである。

現在、ミャンマーでは出家者だけではなく一般の仏教徒も学んでいるものなのでテーラワーダ仏教教義の基礎を系統的に学ぶには最良の入門書である。

東京・ゴータミー精舎、大阪・アナラ精舎、マックスラポール、名古屋・崇覚寺、福岡、大分・明西寺、金沢などで定期的に講義を行ってきたがテキストの必要性を感じつつも先送りにしていたが、このたびやっと出版することができた。最終的には本だけで自習し理解できるようなものを目指したいが今回は講義用のテキストの形で詳しい説明は省いてあるのでご了承願いたい。

瞑想実践だけでは一步間違えると違った方向に行ってしまう、無我の教えである仏教で平気で真我を悟ったなどと言い出す者がいるので基礎的な教義の理解は必須であると思っている。

教義の勉強によって瞑想の妨げになると思っている人もいるようだが、包丁で怪我するのが怖くて台所で使わないようなものである。心配することなく確り学んで欲しいと願っている。

参考文献

アビダンマッタサンガハ ウ・ウェーブッラ長老、戸田忠監訳（アビダンマッタサンガハ刊行会）

*Abhidhamma tin dan po kya kye mya* 1-5 Ven.Sīlānandābhivaṃsa (Burmese)

*Abhidhamma po kya sin* Ven.Vāyāmasāra (Burmese)

*Abhidhammatthasanaha pangone* Ven.Kumāra (Burmese)

## 目次

はじめに		1
目次		3
第一章 摂心分別	Citta-saṅgaha-vibhāga	4
第二章 摂心所分別	Cetasika-saṅgaha-vibhāga	14
第三章 摂雑分別	Pakiṇṇaka-saṅgaha-vibhāga	22
第四章 摂路分別	Vīthi-saṅgaha-vibhāga	29
第五章 摂離路分別	Vīthimutta-saṅgaha-vibhāga	37
第六章 摂色分別	Rūpa-saṅgaha-vibhāga	45
第七章 摂集分別	Samuccaya-saṅgaha-vibhāga	52
第八章 摂縁分別	Paccaya-saṅgaha-vibhāga	59
第九章 摂業処分別	Kammaṭṭhāna-saṅgaha-vibhāga	70

## Abhi dhamma attha saṅgaha=abhidhammatthasaṅgaha

Abhi (自性が) 変わることが無い、特別な、正しい

Dhamma 法

Attha 意味

Saṅgaha 略説、真髓、蔵外の書、撰

Abhidhamma 法集論 dhammasaṅgaṇī、分別論 Vibhaṅga、界論 Dhātukathā、人施設 Puggalapaññatti、論事 Kathāvatthu、双論 Yamaka、発趣論 Paṭṭhāna

Abhidhammattha 心、心所、色、涅槃、施設

Abhidhammatthasaṅgaha アビダンマッタサンガハ

Dhamma 四道、四果、涅槃、教学=十種の法

四道と涅槃が本来の法、四果と教学は取り扱いとして

第一義法（勝義法）Paramattha dhamma 自性が変わることが無い法

1. 心 89 Citta 所縁を知る
2. 心所 52 Cetasika 心に依存して心を飾る
3. 色 28 Rūpa 寒暖などの反対の現象によつてはっきりと分かるように変化する\*
4. 涅槃 Nibbāna 全ての苦が滅した、欲貪などの十種の火が消えた、渴愛から自由になった、本当の幸せ

\*色（物質）以外の法も変化するが色（物質）ほどはっきり見ることができない。

第一義諦 Paramattha sacca では人、男、女は存在せず名（心・心所）、色だけが真理だが一方、世間（世俗）諦 lokiya sacca は世間一般に認められている真理なので人、男、女などは存在すると言っても良い。

名前や概念などを施設と呼ぶが第八章の終わりに詳しく述べてある。

心は純粹な水、心所はその水に混ざる色々な成分の例え。

心と心所は四つの性質（心所相 4）を伴う

同起 同時に生じる（例：眼識と共に生じる 7 心所は共には生じる）

同滅 同時に滅する（例：眼識と共に生じる 7 心所は共には滅する）

同所縁 同じ対象をとる（例：眼識と共に生じる 7 心所は共には色所縁をとる）

同基 同じ物質に依存する（例：眼識と共に生じる 7 心所は共には眼基に依存する）

## I 摂心分別 Citta saṅgaha vibhāga

§3, §36 地心の種類 4 bhūmi citta bheda 領分地によって区分すると心は4種に分けられる

1. 欲界地心 54 欲界処地 11 によく生じる心
2. 色界地心 15 色界処地 15 によく生じる心
3. 無色界地心 12 無色界処地 4 によく生じる心
4. 出世間心 8 涅槃を所縁とした悟りの心

§35 性による分別 jāti bheda

善心 kusala citta 21 賢者から非難されるような罪がなく楽の結果の因となる心  
不善心 akusala citta 12 賢者から非難されるような罪があり苦の結果の因となる心  
無記心 abyākata 56 善・不善心以外の心（下記、唯作心と異熟心）  
唯作心 kiriya citta 20 ただ作用のみの心（引転心 2 以外は阿羅漢にしか生じない）  
異熟心 vipāka citta 36 善・不善の結果としての心

不善心 akusala citta 12 賢者から非難されるような罪があり苦の結果の因となる心

§4 貪根心 8 lobhamūla citta 欲し渴望する貪りの心

1. 喜俱 悪見相応 無行 somanassasahagataṃ diṭṭhigatasampayuttaṃ asaṅkhārika
2. 喜俱 悪見相応 有行 somanassasahagataṃ diṭṭhigatasampayuttaṃ saṅkhārika
3. 喜俱 悪見不相応 無行 somanassasahagataṃ diṭṭhigatavippayuttaṃ asaṅkhārika
4. 喜俱 悪見不相応 有行 somanassasahagataṃ diṭṭhigatavippayuttaṃ saṅkhārika
5. 捨俱 悪見相応 無行 upekkhāsahagataṃ diṭṭhigatasampayuttaṃ asaṅkhārika
6. 捨俱 悪見相応 有行 upekkhāsahagataṃ diṭṭhigatasampayuttaṃ saṅkhārika
7. 捨俱 悪見不相応 無行 upekkhāsahagataṃ diṭṭhigatavippayuttaṃ asaṅkhārika
8. 捨俱 悪見不相応 有行 upekkhāsahagataṃ diṭṭhigatavippayuttaṃ saṅkhārika

①受（感覚、共一切心所 7 の一つ）による分類

喜 somanassa 俱 saḥagata4、捨 upekkhā 俱 saḥagata4

②相応による分類

悪見 diṭṭhigata 相応 sampayutta4、悪見 diṭṭhigata 不相応 vippayutta4

③行による分類

無行 asaṅkhārika4 働きかけがなく自然と強く働く

有行 saṅkhārika4 働きかけがあり自然と弱く働く

1 番目の貪根心の例

喜びの感覚を伴い（喜俱）悪いことを悪いと思わず（悪見）。

自他ともに働きかけがなく自然に強く（無行）人の物を盗むときに生じる心。

2 番目は無行は有行になり、自他共に働きかけがあり弱い（有行）。

3 番目は悪いことは悪いと分かっている（悪見不相応）あとは 1 と同じ。

4 番目は 2 番目と悪見不相応が変わる。

5～8 番目：1～4 までが捨（楽でも苦でもない感覚）が変わる。

§5 瞋根心 2 dosamūla citta 怒りの心、悲泣なども怒りである

憂俱 瞋恚相応 無行 domanassasahagata paṭighasampayuttaṃ asaṅkhārika

憂俱 瞋恚相応 有行 domanassasahagata paṭighasampayuttaṃ sasāṅkhārika

瞋根心は憂の感覚、瞋恚相応のみで区別は無行と有行である。

§6 痴根心 2 mohamūla citta 物事を正しく理解することを曇らせるような無知の心

upekkhāsahagataṃ vicikicchāsampayuttaṃ 捨俱 疑相応

upekkhāsahagataṃ uddhaccasampayuttaṃ 捨俱 悼挙相応

捨俱のみで無行、有行の区別が無い。

貪によって餓鬼界に、痴によって畜生界に、瞋によって地獄へ生まれ変わる原因となるといわれている。

citta 心	Vedanā 受			sampayoga 相応		Sāṅkhāra 行		mūlacitta 根心		
	喜受	憂受	捨受	相応	不相応	無行	有行	貪	瞋	痴
<b>Lobhamūlacitta 8</b> 貪根心	*			悪見		*		*		
	*			悪見			*	*		
	*				悪見	*		*		
	*				悪見		*	*		
			*	悪見		*		*		
			*	悪見			*	*		
			*		悪見	*		*		
<b>Dosa 2</b> 瞋		*		瞋恚		*			*	
		*		瞋恚			*		*	
<b>Moha 2</b> 痴			*	疑						*
			*	悼挙						*
<b>12</b>	<b>4</b>	<b>2</b>	<b>6</b>	<b>8</b>	<b>4</b>	<b>5</b>	<b>5</b>	<b>8</b>	<b>2</b>	<b>2</b>

無因心 18 ahetuka citta

貪、瞋、痴、無貪、無瞋、無痴という因がない心

因とは心にとって木の根に例えられる、18 無因心は結果の心である異熟心と結果を与えない唯作心からなるので力が弱い心の集まりである。

§9 不善異熟心 7 akusala vipāka citta

不善心の結果として好ましくない・・・

捨俱	眼識	upekkhāsahagataṃ	cakkhaviññāṇa	所縁（対象）を見る瞬間の心
捨俱	耳識	upekkhāsahagataṃ	sotaviññāṇa	所縁を聞く瞬間の心
捨俱	鼻識	upekkhāsahagataṃ	ghānaviññāṇa	所縁を嗅ぐ瞬間の心
捨俱	舌識	upekkhāsahagataṃ	jivhāviññāṇa	所縁を味わう瞬間の心
苦俱	身識	dukkhasahagataṃ	kāyaviññāṇa	所縁に触れる瞬間の心
捨俱	領受	upekkhāsahagataṃ	sampaṭicchana	所縁を受け取る瞬間の心
捨俱	推度	upekkhāsahagataṃ	santīraṇa	所縁を調べる瞬間の心

§10 無因善異熟心 8 ahetuka kusala vipāka citta

善心の結果として好ましい・・・

捨俱	眼識	upekkhāsahagataṃ	cakkhaviññāṇa	所縁（対象）を見る瞬間の心
捨俱	耳識	upekkhāsahagataṃ	sotaviññāṇa	所縁を聞く瞬間の心
捨俱	鼻識	upekkhāsahagataṃ	ghānaviññāṇa	所縁を嗅ぐ瞬間の心
捨俱	舌識	upekkhāsahagataṃ	jivhāviññāṇa	所縁を味わう瞬間の心
楽俱	身識	sukhasahagataṃ	kāyaviññāṇa	所縁に触れる瞬間の心
捨俱	領受	upekkhāsahagataṃ	sampaṭicchana	所縁を受け取る瞬間の心
喜俱	推度	somanassahagataṃ	santīraṇa	所縁を調べる瞬間の心
捨俱	推度	upekkhāsahagataṃ	santīraṇa	所縁を調べる瞬間の心

§11 無因唯作異熟心 3 ahetuka kiriya vipāka citta

捨俱 五門引転心 upekkhāsahagataṃ pañcadvārāvajjana citta

眼、耳、鼻、舌、身という五門より生じる心の流れである五門路の始まりに生じる心

捨俱 意門引転心 upekkhāsahagataṃ manodvārāvajjana citta

潜在的な心である有分心、五門路以外の心の流れである意門路の始まりに生じる心

喜俱 笑起心 somanassahagataṃ hasituppāda citta

阿羅漢のみに生じる笑いの心

無因心の受の分別

不善異熟身識	苦受 1
善異熟身識	楽受 1
善異熟推度、唯作生起	喜受 2
上記以外	捨受 14

無因心表 **Ahetuka citta table**

心 citta	vedanā受				nissaya 依止					kicca 作用				無因		受 vedanā		
	樂 Sukha	苦 Dukkha	喜 Somanassa	捨 Upekkhā	眼識 cakku	耳識 sota	鼻識 ghāna	舌識 jihvā	身識 kāya	領受 sampāṭicchana	推度 santiraṇa	引 āvajjana	轉 意門	笑起 hasituppāda	不善異熟 akusala-vi		善異熟 kusala-vi	唯作 kiriya
不善異熟 7・無因善異熟 8				*2	*										1	1		2
				*2		*									1	1		2
				*2			*								1	1		2
				*2				*							1	1		2
		*							*						1			2
	*								*							1		
				*2						*					1	1		2
				*2							*				1	1		3
		*								*					1			
唯作 kiriya				*1							*						1	2
				*1								*					1	
			*										*				1	1
18	1	1	2	14	2	2	2	2	2	2	3	2	1	7	8	3	18	

欲界淨心 24 無貪、無瞋、無痴などの因を含む心

§15 大善心 8 mahā kusala citta

1. 喜俱 智相応 無行 somanassasahagataṃ nāṇasampayuttaṃ asaṅkhārika
2. 喜俱 智相応 有行 somanassasahagataṃ nāṇasampayuttaṃ sasaṅkhārika
3. 喜俱 智不相応 無行 somanassasahagataṃ nāṇavippayuttaṃ asaṅkhārika
4. 喜俱 智不相応 有行 somanassasahagataṃ nāṇavippayuttaṃ sasaṅkhārika
5. 捨俱 智相応 無行 upekkhāsahagataṃ nāṇasampayuttaṃ asaṅkhārika
6. 捨俱 智相応 有行 upekkhāsahagataṃ nāṇasampayuttaṃ sasaṅkhārika
7. 捨俱 智不相応 無行 upekkhāsahagataṃ nāṇavippayuttaṃ asaṅkhārika
8. 捨俱 智不相応 有行 upekkhāsahagataṃ nāṇavippayuttaṃ sasaṅkhārika

1 番の例は喜びの感覚（喜俱）で因果の法則を理解し（智相応）自他ともに働きかけがなく自然に強く（無行）お布施するときなどに生じる心。

貪根心の分類の仕方を悪見相応を智相応などに替えて善心として理解する。

ここでの大の意味は他の心と比べると数が多いから。

§16 大異熟心 8 mahā vipāka citta (善心の結果としての心で潜在的な心の流れとして働く)

1. 喜俱 智相応 無行 somanassasahagataṃ nāṇasampayuttaṃ asaṅkhārika
2. 喜俱 智相応 有行 somanassasahagataṃ nāṇasampayuttaṃ sasaṅkhārika
3. 喜俱 智不相応 無行 somanassasahagataṃ nāṇavippayuttaṃ asaṅkhārika
4. 喜俱 智不相応 有行 somanassasahagataṃ nāṇavippayuttaṃ sasaṅkhārika
5. 捨俱 智相応 無行 upekkhāsahagataṃ nāṇasampayuttaṃ asaṅkhārika
6. 捨俱 智相応 有行 upekkhāsahagataṃ nāṇasampayuttaṃ sasaṅkhārika
7. 捨俱 智不相応 無行 upekkhāsahagataṃ nāṇavippayuttaṃ asaṅkhārika
8. 捨俱 智不相応 有行 upekkhāsahagataṃ nāṇavippayuttaṃ sasaṅkhārika

§17 大唯作心 8 mahā kiriya citta (仏陀・阿羅漢のみに生じ結果を与えない行為のみの心)

1. 喜俱 智相応 無行 somanassasahagataṃ nāṇasampayuttaṃ asaṅkhārika
2. 喜俱 智相応 有行 somanassasahagataṃ nāṇasampayuttaṃ sasaṅkhārika
3. 喜俱 智不相応 無行 somanassasahagataṃ nāṇavippayuttaṃ asaṅkhārika
4. 喜俱 智不相応 有行 somanassasahagataṃ nāṇavippayuttaṃ sasaṅkhārika
5. 捨俱 智相応 無行 upekkhāsahagataṃ nāṇasampayuttaṃ asaṅkhārika
6. 捨俱 智相応 有行 upekkhāsahagataṃ nāṇasampayuttaṃ sasaṅkhārika
7. 捨俱 智不相応 無行 upekkhāsahagataṃ nāṇavippayuttaṃ asaṅkhārika
8. 捨俱 智不相応 有行 upekkhāsahagataṃ nāṇavippayuttaṃ sasaṅkhārika



欲界心 54 のまとめ

不浄心 asobhana citta 30

(不善 akusal 12、無因 ahetuka 18 の二つを浄心以外ということで不浄心と呼ぶ)

欲界浄心 kāmāvacarasobhanacitta 24

(大善心 8、大異熟心 8、大唯作心 8)

= 欲界心 54

欲界浄心表 **Kāmāvacara sobhana citta table**

citta	vedanā 受		ñāṇa 智		行		citta 心			
	喜	捨	相応	不	無	有	善	異	唯	
大善心 8 ・大異熟心 8 ・大唯作心 8	*		*		*		1	1	1	3
	*		*			*	1	1	1	3
	*			*	*		1	1	1	3
	*			*		*	1	1	1	3
		*	*		*		1	1	1	3
		*	*			*	1	1	1	3
		*		*	*		1	1	1	3
		*		*		*	1	1	1	3
24	12	12	12	12	12	12	8	8	8	24

欲界心			
不善心	12	12	貪根心 8 lobha、瞋根心 2 dosa、痴根心 2 moha
不善異熟心	7	18	五識 5 pañcavinñāṇa、領受 1 sampañicchana、推度 1 santīraṇa
無因善異熟心	8		五識 5 pañcavinñāṇa、領受 1 sampañicchana、推度 2 santīraṇa
無因唯作心	3		五門引転 1、意門引転 1、笑起 1 hasituppāda
大善心	8	24	
大異熟心	8		
大唯作心	8		
	54		

欲界心を性分別すると

Akusala 不善心 貪 8 lobha+瞋 2 dosa+痴 2 moha=12

Kusala 善心 大 8 mahā

Kiriya 唯作心 無因 3 ahetuka+大 8 mahā =11

Vipāka 異熟心 不善 7 akusala+無因善 8 ahetukakusala+大 8 mahā=23

## 色界心 15 Rūpāvacara citta

色界処地において普通生じるので色界心と呼ぶ。

26 種のサマタ瞑想の実践によって生じさせることが出来る心。

尋 vitakka、伺 vicāra、喜 pīti、楽 sukha（受 vedanā）、一境性 ekaggatā それぞれを禅支 jhānaṅga と呼び、禅支の集まりを禅と呼ぶ、その禅とともに生じる心を禅心 jhāna citta という。

色界禅心、無色界禅心は高度に集中した心の状態で最高七日間まで入り続けることが出来る。

### 地遍によるサマタ瞑想の例

戒律を確り守り、静かな場所で適当な色の土を布を木の枠に張った物の上に 30cm ぐらいの円を描き塗りつける。120cm ぐらい離れたところから「地 patavī・・・」と心の中で念じて集中していく遍作相、実際の土を見なくても心に現れてくるようになる取相。さらに心に現れた遍に集中していくと遍が光輝くようになり似相、さらに集中していくと禅定に達することが出来る。

さらに高い禅定に達するには禅支を一つ一つ取り除いて実践していく。

## §21 色界善心 5 Rūpāvacara kusala citta

尋 vitakka、伺 vicāra、喜 pīti、楽 sukha（受 vedanā）、一境性 ekaggatā と俱にある初禅善心

伺 vicāra、喜 pīti、楽 sukha（受 vedanā）、一境性 ekaggatā と俱にある第二禅善心

喜 pīti、楽 sukha（受 vedanā）、一境性 ekaggatā と俱にある第三禅善心

楽 sukha（受 vedanā）、一境性 ekaggatā と俱にある第四禅善心

捨 upekkhā（受 vedanā）、一境性 ekaggatā と俱にある第五禅善心

## §22 色界異熟心 5 Rūpāvacara vipāka citta（色界地において結生・有分・死心として働く）

尋 vitakka、伺 vicāra、喜 pīti、楽 sukha（受 vedanā）、一境性 ekaggatā と俱にある初禅異熟心

伺 vicāra、喜 pīti、楽 sukha（受 vedanā）、一境性 ekaggatā と俱にある第二禅異熟心

喜 pīti、楽 sukha（受 vedanā）、一境性 ekaggatā と俱にある第三禅異熟心

楽 sukha（受 vedanā）、一境性 ekaggatā と俱にある第四禅異熟心

捨 upekkhā（受 vedanā）、一境性 ekaggatā と俱にある第五禅異熟心

## §23 色界唯作心 5 Rūpāvacara kiriya citta

尋 vitakka、伺 vicāra、喜 pīti、楽 sukha（受 vedanā）、一境性 ekaggatā と俱にある初禅唯作心

伺 vicāra、喜 pīti、楽 sukha（受 vedanā）、一境性 ekaggatā と俱にある第二禅唯作心

喜 pīti、楽 sukha（受 vedanā）、一境性 ekaggatā と俱にある第三禅唯作心

楽 sukha（受 vedanā）、一境性 ekaggatā と俱にある第四禅唯作心

捨 upekkhā（受 vedanā）、一境性 ekaggatā と俱にある第五禅唯作心

禪心表 Jhānacitta table

大 mahāgata	jhāna					禪 心 名	心 citta			計	受 分 別	
	尋 Viakka	伺 vicāra	喜 pīti	受 vedanā			一境性 ekaggatā	善 kusala	異熟 vipāka			唯作 kiriya
				樂 sukha	捨 upekkhā							
色界心 15	*	*	*	*		*	初禪	1	1	1	3	喜 somanassa
		*	*	*		*	第二	1	1	1	3	
			*	*		*	第三	1	1	1	3	
				*		*	第四	1	1	1	3	
					*	*	第五	1	1	1	3	
無色界 12					*	*	空無邊處	1	1	1	3	捨 upekkhā
					*	*	識無邊處	1	1	1	3	
					*	*	無處有處	1	1	1	3	
					*	*	非想非非想處	1	1	1	3	
計								9	9	9	27	27

## 無色界心 12 Arūpāvacara citta

禅支は第五禅定と同じ、無色界処地において普通生じるので無色界心と呼ぶ

### §26 無色界善心 4 (将来、無色界地に転生させる業をつくる善心)

空無辺処善心

色界五禅定を自在した修行者はさらに高い禅定を得るため、又は無色界に転生するために第五禅の瞑想対象である 10 遍から空遍を除いた遍によって第五禅定に入定する。その後、今まで集中していた遍を無視して取り除くと今まで遍があった場所が無辺の空間となり、その無辺の空間に意識を向け「空は無辺 ākāsa ananto . . . 」と集中して達する禅定が第一無色界禅である。

識無辺処善心

第一無色界禅は色界禅に近く不安定であると考えさらに高い禅定に達するために、「(第一無色界禅) 識は無辺である anantaṃ viññāṇaṃ . . . 」と修行していくと第二無色界禅に達する。

無処有処善心

さらに高い禅定に達するために第一無色界識が無いという施説である無処有処に「何もない natthi kiñci . . . 」と集中して達する禅定。

非想非非想処善心

さらに高い禅定に達するために第三無色界識を所縁として「これは静寂 santametam pañītametaṃ . . . 」と集中して達する禅定。

### §27 無色界異熟心 4 (無色界地において結生・有分・死心として働く)

空無辺処異熟心、識無辺処異熟心、無処有処異熟心、非想非非想処異熟心

### §28 無色界唯作心 4 (仏陀・阿羅漢のみに生じ結果を与えない行為のみの心)

空無辺処唯作心、識無辺処唯作心、無処有処唯作心、非想非非想処唯作心

## Arūpāvacara citta 12 無色界心

無色界心		超えるべき所縁	無色界心の所縁
空無辺処	ākāsānañcāyatana	遍 kasiṇa	空所縁
識無辺処	viññāṇañcāyatana	空施設 ākāsapaññatti	初無色識所縁
無処有処	ākiñcaññāyatana	初無色識	無所有施設所縁
非想非非想処	nevasaññānāsaññāyatana	無所有施設	第三無色識所縁

出世間心 lokuttra citta 8

§31 道心 magga citta 4 出世間善心 (涅槃を所縁とする善心)

預流道 sotāpatti magga

因果の法則、仏法僧に対する疑、八正道を含まない間違った修行法に対する執着、すべての邪見、疑(悪見相応貪根心4、疑相応痴根心1)を完全に取り除き、悪趣へ導くような粗い不善心が生じないように残りの煩惱を弱める

一來道 sakadāgāmi magga

残った煩惱をさらに弱めるが完全に取り除く煩惱はない

不還道 anāgāmi magga

瞋根心2、五欲に対する渴愛を完全に取り除く、色界地、無色界地に対する有への渴愛が残っている

阿羅漢道 arahatta magga

全ての煩惱を取り除く

涅槃を所縁とする悟りの瞬間の心、随眠煩惱をそれぞれの道のレベルに応じて取り除いたり弱くしたりする働きがあり正見、正思惟、正語、正業、正命、正精進、正念、正定という勝義の八正道と対応する。凡夫が実践する八正道は後退することがあるが勝義の八正道と共に生じる道心はすぐに果という結果を与え二度と後戻りすることは無い

八出世間心を五禅心に対応させると 40 心となる

§32 果心 phala citta 4 出世間異熟心

預流果 sotāpatti phala、一來果 sakadāgāmi phala、不還果 anāgāmi phala、阿羅漢果 arahatta phala

涅槃を所縁とする悟りの結果としての心、悟りに応じた果定に最高7日まで何度でも入り続けるができる

出世間心 Lokuttaracitta	禅支 jhānaṅga						禅心の名前	出世間心 Lokuttarācitta 8								禅心計	受分別	
	尋 Vitakka	伺 vicāra	喜 pīti	vedanā受		一境性 ekaggatā		道心 Maggacitta4				果心 Phalacitta 4						
				樂 sukha	捨 upekkhā			預流	一來	不還	阿羅漢	預流	一來	不還	阿羅漢			
道 Magga 20 果 Phala 20	*	*	*	*		*	初	1	1	1	1	1	1	1	1	1	8	喜 somanassa 32
		*	*	*		*	二	1	1	1	1	1	1	1	1	1	8	
			*	*		*	三	1	1	1	1	1	1	1	1	1	8	
				*		*	四	1	1	1	1	1	1	1	1	1	8	
					*	*	五	1	1	1	1	1	1	1	1	1	8	捨
	心計							5	5	5	5	5	5	5	5	5	40	40

## II 摂心所分別 Cetasika saṅgaha vibhāga

### §1 心所相 4 cetasika lakkhaṇa

心が心所と相応する特徴

同起 ekuppāda、同滅 ekanirodhā、同所縁 ekārammaṇa、同基 ekavatthukā

### §2 同他心所<sup>どう た しんじょ</sup>13 aññāsamāna cetasika

善、不善などの性に関わらず適宜に相応する心所（共一切心心所と雑心所）

共一切心心所<sup>く いっさいしんしんじょ</sup>7 sabbacittasādhāraṇa 全ての心に必ず相応する心所

1. 触<sup>そく</sup>phassa 所縁に触れるという特相をもつ法
2. 受<sup>じゅ</sup>vedanā 所縁の苦楽を感じるという特相をもつ法
3. 想<sup>そう</sup>saññā 所縁を表象するという特相をもつ法
4. 思<sup>し</sup>cetanā 所縁に相応法を向ける特相をもつ法
5. 一境性<sup>いっきょうしょう</sup>ekaggatā 一つだけの所縁を取って集中する、散乱しない特相をもつ法
6. 命根<sup>みょうこん</sup>jīvitindriya 同時に生じる名法を維持、コントロールする特相をもつ法
7. 作意<sup>さい</sup>manasikāra 所縁を心に入れる特相をもつ法

§3 雑心所<sup>ぞう</sup>6 pakiṇṇaka ある心にだけ対応し、ある心には対応しないように混ざって対応する心所なので雑心所と呼ぶ

1. 尋<sup>じん</sup>vitakka 相応法を所縁に最初に向ける特相をもつ法
2. 伺<sup>し</sup>vicāra 所縁において相応法を思惟する特相をもつ法
3. 勝解<sup>しょうげ</sup>adhimokkha 所縁を決定する特相をもつ法
4. 精進<sup>しょうじん</sup>vīriya 相応法を支持させる特相をもつ法
5. 喜<sup>き</sup>pīti 所縁を好む特相をもつ法
6. 意欲<sup>いよく</sup>chanda 行いたいだけの特相をもつ法

§4 不善心所 14 akusala cetasika

不善心のみに対応する心所

1. 痴<sup>ち</sup>moha 所縁の性質を覆い隠し知ることが出来ない特相をもつ法
2. 無慚<sup>むざん</sup>ahirika 心悪行などをなすことを恥じない特相をもつ法
3. 無愧<sup>むき</sup>anottappa 心悪行などをなすことを恐れない特相をもつ法
4. 悼<sup>じょうこ</sup>拳uddhacca 心の静まらない、散乱した特相をもつ法
5. 貪<sup>とん</sup>lobha 所縁に取り付くようにたびたび好む特相をもつ法
6. 見<sup>けん</sup>diṭṭhi 間違って心に入れる特相をもつ法
7. 慢<sup>まん</sup>māna 自分だけが尊いと尖塔の先のように高ぶる特相をもつ法
8. 瞋<sup>しん</sup>dosa 荒々しく非難されることをなす特相をもつ法
9. 嫉<sup>しつ</sup>issā 他人の豊かさや幸せを耐えられない特相をもつ法
10. 慳<sup>けん</sup>macchariya 自分の豊かさや幸せを隠す特相をもつ法
11. 悪作<sup>あくさ</sup>kukkucca 過去になした不善、なさなかつた善を所縁として何度も心配する特相をもつ法
12. 憊<sup>こんぢん</sup>沈thīna 心が確りせず、沈む特相をもつ法
13. 睡眠<sup>すいめん</sup>middha 心所が確りせず、沈む特相をもつ法
14. 疑<sup>ぎ</sup>vicikicchā 所縁を決定することが出来ない特相をもつ法

§5 浄心所 25 kusala cetasika

共浄心所 19 sobhana sādharma cetasika 全ての浄心と対応する心所

1. 信<sup>しん</sup>saddhā 仏法僧などの善い所縁に対し相応法を澄ませる特相をもつ法
2. 念<sup>ねん</sup>sati 仏法僧などの善い所縁に対し相応法を忘れさせない特相をもつ法
3. 慚<sup>ざん</sup>hiri 心悪行などをなすことを恥じる特相をもつ法
4. 愧<sup>き</sup>ottappa、心悪行などをなすことを恐れる特相をもつ法
5. 無貪<sup>むとん</sup>alobha 所縁に執着しない特相のある法
6. 無瞋<sup>むしん</sup>adosa 荒々しくなく非難されない行いの特相のある法
7. 中捨<sup>ちゅうしゃ</sup>tatramajjhata それぞれの所縁に相応法を平静にさせる特相がある法
8. 身軽安<sup>しんきょうあん</sup>kāyappassaddhi (善行において) 心所の安らかな特相のある法
9. 心軽安 citta- (善行において) 心の安らかな特相のある法
10. 身軽快性<sup>きょうかいしょう</sup>kāyalahutā (善行において) 心所の軽やか特相のある法
11. 心軽快性 citta- (善行において) 心の軽やか特相のある法
12. 身柔軟性<sup>にゅうねん</sup>kāyamudutā (善行において) 心所の柔らかな特相のある法
13. 心柔軟性 citta- (善行において) 心の柔らかな特相のある法
14. 身適業性<sup>ちやくごうしょう</sup>kāyakammaññatā (善行において) 心所の確りしている特相のある法
15. 心適業性 citta- (善行において) 心の確りしている特相のある法
16. 身練達性<sup>れんだつしょう</sup>kāyapāguññatā (善行において) 心所の熟練、精通する特相のある法
17. 心練達性 citta- (善行において) 心の熟練、精通する特相のある法
18. 身端直性<sup>たんじきしょう</sup>kāyujukatā (善行において) 心所の真直ぐ生じるという特相のある法
19. 心端直性 citta- (善行において) 心の真直ぐ生じるという特相のある法



## §6 離心所 3 virati cetasika

身悪行 3 種、口悪行 4 種などを避けるという特相があるので離心所と呼ばれている

### 1. 正語 <sup>しょうご</sup>sammāvācā、

(仕事と関係のない) 妄語、離間語、僞悪語、綺語という口悪行 4 種などを避けるという特相のある法

### 2. 正業 <sup>しょうごう</sup>sammākammanta、

(仕事と関係のない) 殺生、偷盜、邪欲行という身悪行 3 種などを避けるという特相のある法

### 3. 正命 <sup>しょうみょう</sup>sammā ājīva

仕事と関係のある身悪行 3 種、口悪行 4 種などを避けるという特相がある法

## §7 無量心所 2 appamañña cetasika

1. 悲 <sup>ひ</sup>karuṇā 無量の苦しんでいる衆生を所縁として悲れむ特相がある法

2. 喜 <sup>き</sup>muditā 無量の幸せな衆生を所縁として喜ぶ特相がある法

### <sup>えこん</sup>慧根心所 1 paññindriya cetasika

慧根 paññindriya 特に詳しく知るということを支配するという特相がある法

心所 5 2 = 1 3 (7 + 6) + 1 4 (4+3+4+2+1) + 2 5 (1 9 + 3 + 2 + 1)

\*パーリ語の訳で喜は喜受 somanassa vedanā、雑心所の喜 pīti、無量心所の喜 muditāと同じになっているので注意が必要である

§9 相応の仕方 Sampayoga naya

ある心所がどれだけの心に相応するか分析するのが相応の仕方である

不善心 27、浄心 38 は相応する心所を合計した数で実際に相応する最大の数ではない

心 citta 89 cetasika 52 心所		不浄心 asobhana citta 30		sobhana citta 59 浄心
		不善 akusala citta	無因 ahetuka citta	
同他	共一切心心所 7	*	*	*
	雑心所 pakiṇṇaka 6	*	*	*
不善 akusala cetasika 14		*		
浄 sobhana cetasika 25				*
心所合計 cetasika total		27	12	38

共一切心心所 7 sabbacittasādhāraṇa

触、受、想、思、一境性、命根、作意の心所は全ての心と対応する

初禪 11 など=初禪に対応する出世間心 8 と色界善 1、色界異熟 1、色界唯作 1

尋、伺、喜 pīti は禪支なので 121 で数える

Aññāsamāna cetasika table

同他心所表

aññāsamāna 同他	不相応	相応	total
vitakka 尋	二つの五識 10+ 第二禪から第五禪 44+ 無色界心 12 =66	(欲界心 54-10)+ 初禪 11=55	121
vicāra 伺	二つの五識 10+ 第三禪から第五禪 33+ 無色界心 12 =55	尋相応心 55+ 第二禪 11=66	121
adhimokkha 勝解	二つの五識 10+ 疑 1=11	疑を除く不善心 11+ 二つの五識を除く 無因心 8+ 浄心 59=78	89
vīriya 精進	意門引転、笑起を 除く無因心=16	不善 12+ 意門引転、笑起 2+ 浄心 59=73	89
pīti 喜	捨俱心 55+ 瞋根心 2+ 身識 2+ 第四禪 11=70	喜俱貪根心 4+ 喜俱推度、笑 2+ 喜俱欲界浄心 12+ 初禪より第三禪 33=51	121
chanda 意欲	無因心 18+ 痴根心 2=20	痴根心を除く不善 10+ 浄心 59=69	89

Ahetukacitta sampayoga table

無因心 相応表

ahetukacitta 18 無因心 同他心所 13 aññāsamānacetāsika	二つの五識 10	五門引転・領受 2・捨推度 2	喜俱推度 1	意門引転 1	笑起 hasituppāda 1	心合計 citta total
共一切心心所 7 sabbacittasādhāraṇa	*	*	*	*	*	18
尋 vitakka、伺 vicāra、勝解 adhimokkha 3		*	*	*	*	8
精進 vīriya				*	*	2
喜 pīti			*		*	2
意欲 chanda						
*摂め方	7	10	11	11	12	

\*摂め方とは心に心所がいくつ摂められているのか明らかにする方法

§17 決定、不決定相応の心所

心所の相応心が生じるたびに常に相応するわけではない心所を不決定相応の心所 11 aniyata yogi cetasika と呼び、心所の相応心が生じるたびに常に相応する心所を決定相応の心所 41 niyata yogi cetasika と呼ぶ

不決定相応の心所 11

瞋と相応する心所（嫉、慳、悪作）、離心所（正語、正業、正命）、無量心所（悲、喜 muditā）は所縁が違ふので別々 nānā に或る時 kadāci に相応する

昏沈、睡眠は同時に或る時に相応する

慢は或る時に相応する

離心所は出世間心に相応するときは所縁が涅槃で同じなので常に 3 心所一緒に相応する

決定相応の心所

残りの 41 心所は相応する心が起こるたびに常に相応するので決定相応と呼ばれている

Akusalacitta sampayoga table

不善心 相応表

akusalacitta 12 不善心 cetasika 27 心所	貪根心 lobhamūlacitta 8								瞋根心		痴根心		心合計
	喜俱・惡見相応・無行	喜俱・惡見相応・有行	喜俱・惡見不相応・無	喜俱・惡見不相応・有	捨俱・惡見相応・無行	捨俱・惡見相応・有行	捨俱・惡見不相応・無	捨俱・惡見不相応・有	憂俱瞋恚相応・無行	憂俱瞋恚相応・有行	捨俱・疑相応	捨俱・掉拳相応	
同他 10, 共不善 4=14	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	12
勝解 adhimokkha	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*		*	11
喜 pīti	*	*	*	*									4
意欲 chanda	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*			10
貪 lobha	*	*	*	*	*	*	*	*					8
見 diṭṭhi	*	*			*	*							4
慢 māna			*	*			*	*					4
瞋、嫉、慳、惡作 4									*	*			2
昏沈、睡眠 2		*		*		*		*		*			5
疑 vicikicchā											*		1
摂め方	19	21	19	21	18	20	18	20	20	22	15	15	

Kāma vacarasobhanacitta sampayoga table

欲界淨心相応表

Kāmasobhana citta 24 欲界淨心 Aññ,sobh cetasika 38	大善 mahākusala 8				大異熟 mahāvīpāka 8				大唯作 mahākiriya8				心合計
	喜俱・慧相応	喜俱・慧不相応	捨俱・慧相応	捨俱・慧不相応	喜俱・慧相応	喜俱・慧不相応	捨俱・慧相応	捨俱・慧不相応	喜俱・慧相応	喜俱・慧不相応	捨俱・慧相応	捨俱・慧不相応	
同他 12, 共淨 19 =31	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	24
喜 pīti	*	*			*	*			*	*			12
離 3 virati	*	*	*	*									8
無量 2 appamaññā	*	*	*	*					*	*	*	*	16
慧根 paññindriya	*		*		*		*		*		*		12
摂め方	38	37	37	36	33	32	32	31	35	34	34	33	

Mahaggata citta Lokuttarā citta sampayoga table

大心相応表

Mahaggata, lokuttara citta 大心、出世間心	大 Mahaggata 27					出世間 Lokuttarā 40					心合計
	第一禪定	第二禪定	第三禪定	第四禪定	第五禪定	第一禪定	第二禪定	第三禪定	第四禪定	第五禪定	
同他、共一切心心所 Aññasamāna, sobhanactasika 38											
同他 9 aññ, 淨 19 so, 慧 1 paññā = 29	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	67
尋 1 vitakka	*					*					11
伺 1 vicāra	*	*				*	*				22
喜 1 pīti	*	*	*			*	*	*			33
受 vedanā		樂 sukha	*	*	*	*		*	*	*	44
		捨 upekkhā					*				*
離 3 virati						*	*	*	*	*	40
無量 2 appamaññā	*	*	*	*							12
摂め方	35	34	33	32	30	36	35	34	33	33	

欲界浄心 摂め方

Citta 心	kusala 善	Kiriya 唯作 - 離 3	Vipāka 異熟 -(3+2)
1, 2	13+19+3+2+1=38	13+19+2 +1=35	13+19 +1=33
3, 4 - 慧ñāṇa	13+19+3+2 =37	13+19+2 =34	13+19 =32
5, 6 - 喜 Pīti	12+19+3+2+1=37	12+19+2 +1=34	12+19 +1=32
7, 8 - 喜、慧	12+19+3+2 =36	12+19+2 =33	12+19 +1=31

Citta	離 3 (正語、正業、正命)	無量 2 (悲 karuṇā, 喜 muditā)
Lokuttara citta 出世間心	○ 出世間心は例外で同時に	× 涅槃が所縁なので
Mahākiriya citta 大唯作心	× 離心所は善心のみ	○
Mahākusala citta 大善心	○	○
Mahāvīpāka citta 大異熟	× 離心所は善心のみ	× 大異熟心は欲界所縁なので

	visesaka 心を分ける特質
Lokuttara citta 出世間心	禪 jhāna
Mahaggata citta 大心	無量 appamaññā, 禪 jhāna
Kāma vacarasobhana citta 欲界浄心	離 virati, 慧ñāṇa, 喜 pīti, 無量 appamaññā

### III 撰雜分別 Pakiṇṇaka saṅgaha vibhāga

心、心所を受、因、作用、門、所縁、基の6要目によって分析する章

自性より 53

89 心は所縁を知るという自性からは一つであり、52 心所はそれぞれ、触は所縁に触れるという自性など自性が異なるので自性から見た心心所は 53 種となる

Vedanā =>cetasika 受より心所を分類 §2~4

vedanā受	楽受 sukhavedanā	苦受 dukkhāvedanā	喜受 somanassa	憂受 domanassa	捨受 upekkhā	
cetasika 心所 5 2	心数→	1	1	62	2	55
瞋、嫉、慳、悪作 4				*		6
疑 1 vicikicchā					*	
喜 1 pīti			*			
貪、見、慢、+ 淨心所 25 = 28			*		*	28
雑心所 5, 共不善 4, 昏沈睡眠=11			*	*	*	11
受除く共一切心心所 6	*	*	*	*	*	6
受 1 vedanā						1
それぞれの受と共に生じる心所	6	6	46	21	46	52

受

- 1 苦受 一切皆苦により 1 種
- 2 苦、楽 捨受を平静な感覚により楽受に入れることによって 2 種
- 3 苦、楽、不苦不楽 所縁の感受の違いによって 3 種 ārammaṇānubhavana
- 5 苦、楽、憂、喜、捨 根の違いによって 5 種 indriyabheda

- 苦受 1 不善異熟身識 1
- 憂受 2 瞋根心 2
- 楽受 1 無因善異熟身識 1
- 喜受 62 喜相応貪根心 4、喜受推度心 1、笑起心 1、喜受欲界淨心 12、初禪から第四禪まで 44

- 捨受 55 捨受貪根心 4、痴根心 2、身受 2 をのぞく二つの五識 8、領受心 2、捨受推度心 2、引転心 2、捨受欲界淨心 12、第五禪 11、無色界心 12

§5 因 6

因とは貪・瞋・痴・無貪・無瞋・無痴の 6 種である

不善の因

- 貪 貪根心 8
- 瞋 瞋根心 2
- 痴 不善心 12

善、無記（異熟心、唯作心）の因

- 無貪 淨心 59
- 無瞋 淨心 59
- 無痴 欲界智相応淨心 12、大心 27（色界心 15、無色界心 12）、出世間心 8

§6 因による心分別

- 無因心 18 二つの五識 10、領受心 2、推度心 3、引転心 2、笑起心 1
- 一因心 2 痴根心 2
- 二因心 22 貪 8、瞋 2、欲界智不相応淨心 12
- 三因心 47 欲界智相応淨心 12、大心 27、出世間心 8

因による心所分別

hetu 因	貪	瞋	痴	無貪	無瞋	無痴	因の合計	心所
Cetasika 心所 52 因相応心の数→	8	2	12	59	59	47		
疑 vicikicchā, 貪 lobha, 瞋 dosa 3			*				1	3
痴 1 moha	*	*					2	9
見 diṭṭhi, 慢 māna 2	*		*				2	
嫉 Issā, 慳 macchariya, 悪作 kukkucca 3		*	*				2	
無貪 1 alobha					*	*	2	
無瞋 1 adosa				*		*	2	
無痴 1 amoha				*	*		2	
無慚、無愧、掉挙、昏沈、睡眠 5	*	*	*				3	27
三因を除いた淨心所 22				*	*	*	3	
喜 1 pīti	*		*	*	*	*	5	1
pīti を除いた aññasamāna 同他心所 12	*	*	*	*	*	*	6	12
それぞれの因と共に生じる心所	21	21	26	37	37	37		52

§8 作用 14 kicca §9 時域 ṭhāna 時域では見、聞、嗅、嘗、触（4～8）が五識という時域となり 10 となる

1. 結生 19 現世における最初の瞬間の心で二つの生をつなぐ働きにより結生と呼ぶ、最初の有分心  
捨俱推度 2、大異熟 8、色界異熟 5、無色界異熟 4 結生・有分・死は一生の間同じ種類の心である
2. 有分 19 生を途切れさせないようにする働きで潜在的な心
3. 引転 2 所縁を考察する働き 五門引転心 1、意門引転心 1
4. 見 2 色所縁を見る働き 眼識 2
5. 聞 2 声所縁を聞く働き 耳識 2
6. 嗅 2 香所縁を嗅ぐ働き 鼻識 2
7. 嘗 2 味所縁を味わう働き 舌識 2
8. 触 2 触所縁に触れる働き 身識 2
9. 領受 2 所縁を受け取る働き 領受 2
10. 推度 3 所縁を調べる働き 推度 3
11. 確定 1 所縁を確定する働き 意門引転心 1
12. 速行 55 所縁をはっきり知る、早く知る、感じる働き  
速行心は引転 2 を除く善 21、不善 12、唯作 18 と果 4（出世間異熟） 55
13. 彼所縁 11 速行心と同じ所縁をさらに所縁として知る働き 大異熟 8、推度 3
14. 死 19 現在生の最後の刹那の有分心

Kicca 作用 14	結生・有分・死 35	引転 11	五識の時域 Pañcaviññāṇa ṭhāna					領受 10	推度 11	確定 11	速行 52	彼所縁 33	作用合計
			見 7	聞 7	嗅 7	嘗 7	触 7						
citta 心 89													
Cakkhaviññāṇa 眼識 2			*										1
Sotaviññāṇa 耳識 2				*									1
Ghānaviññāṇa 鼻識 2					*								1
Jivhāviññāṇa 舌識 2						*							1
Kāyaviññāṇa 身識 2							*						1
Sampaṭicchana 領受 2								*					1
Upe-Santīraṇa 捨推度 2	*								*			*	5
Soma-Santīraṇa 喜推度 1									*			*	2
Pañcadvārāvajjana 五門引		*											1
Manodvārāvajjana 意門引		*								*			2
Javana 速行 55											*		1
Mahāvīpāka 大異熟 8	*											*	4
Mahaggatavīpāka 上異 9	*												3
Kicca 作用	19	2	2	2	2	2	2	2	3	1	55	11	



- 1 作用 68 速行 55、五門引転 1、領受 2、二つの五識 10  
 2 作用 2 意門引転 1、喜俱推度 1  
 3 作用 9 上二界異熟（色界異熟 5、無色界異熟 4）結生・有分・死心  
 4 作用 8 大異熟 8 結生・有分・死心、彼所縁  
 5 作用 2 捨俱推度 2 推度、結生・有分・死心、彼所縁

§13 門 6

門とは眼門、耳門、鼻門、舌門、身門、意門の 6 種である

- 眼門 眼基色  
 耳門 耳基色  
 鼻門 鼻基色  
 舌門 舌基色  
 身門 身基色  
 意門 有分心が意門（心基色ではない）

Dvāra 門の撰 §14-16	色五門					意門	離門	門の計
	眼門	耳門	鼻門	舌門	身門			
Citta 心 89								
五門引転 1	*	*	*	*	*			5
眼識 2	*							1
耳識 2		*						1
鼻識 2			*					1
舌識 2				*				1
身識 2					*			1
領受 2	*	*	*	*	*			5
喜推度 1	*	*	*	*	*	*		6
捨推度 2	*	*	*	*	*	*	X	6*
大異熟 8	*	*	*	*	*	*	X	6*
確定（意門引転） 1	*	*	*	*	*	*		6
欲界速行 29 =12+1+16	*	*	*	*	*	*		6
安止速行 26=10+8+8						*		1
上 2 界異熟 5+4=9							X	
それぞれの門に生じる心	46	46	46	46	46	67	19	

§17 所縁 6

- 6 色所縁、声所縁、香所縁、味所縁、触所縁（地、火、風）4+3=7、  
 法所縁（浄色 5、細色 16、心 89、心所 52、涅槃、施設）
- 4 欲界所縁（心 54、心所 52、色 28、）大所縁（心 27、心所 35）\*無量所縁（出世間 8、心所 36、涅槃）施設所縁
- 4 現在所縁（心 89、心所 52、色 28、）、過去所縁、未来所縁、離時所縁（涅槃、施設）
- 3 内処所縁（心、心所、色）、外処所縁（心、心所、色、涅槃、施設）、離内外処所縁（natthibhava paññatti）
- 3 色所縁 28、名所縁（心 89、心所 52、涅槃）、施設所縁
- 2 勝義所縁（心 89、心所 52、色 28、涅槃）、施設所縁

\*無量心所の悲心所は苦しんでいる衆生、喜心所は幸せな衆生という施設所縁をとり、出世間 8、心所 36、涅槃の無量所縁とは別である

	6種の所縁					
	6色、声、香、味、触、法	4欲界、大、無量、施設	4現在、過去、未来、離時	3内処、外処	3色所縁、名所縁、施設	2勝義、施設
10 二つの五識 (2眼・2耳・2鼻・2舌・2身)	5	欲界	現在	内、外	色	勝義
3 manodhātu 眼界 (1 五門引転+2 領受心)	5	欲界	現在	内、外	色	勝義
12=8+3+1 彼所縁 tadārammaṇa11= 8 大異熟心+3 推度心、 笑起心 hasituppāda 1	6	欲界	3	内、外	色、名	勝義
20= 12 不善+4 善智不相応速行 +4 唯作智不相応速行	6	欲、大、施	4	3	3	2
5=4 智相応善+1 神通	6	4	4	3	3	2
6=4 智相応唯作+1 神通 +1 意門引転	6	4	4	3	3	2
6=3 善、異熟、唯作 ×2 第二、四無色界心	法	大	過去	内	名	勝義
21= 15 色界心 (3 善、異熟、唯作 x5 禅定) +3 善、異熟、唯作 ×2 第一、三無色界心	法	施設	離時	外*	施設	施設
8 lokuttara 出世間	法	無量 (涅槃)	離時	外	名	勝義

杖や手すりなどを頼って病人が立てるように、この色、声、香、味、触、法という六所縁も心、心所を杖で支えるような縁があるので所縁と呼ぶ

色所縁、声所縁、香所縁、味所縁、触所縁 法所縁

		色所縁	声所縁	香所縁	味所縁	触所縁	法所縁	
10 欲界のみ 単所縁	眼識 2 cakkhaviññāṇa	*						1
	耳識 2 sotaviññāṇa		*					1
	鼻識 2 ghānaviññāṇa			*				1
	舌識 2 jivhāviññāṇa				*			1
	身識 2 kāyaviññāṇa					*		1
3 欲界のみ 単所縁	意界 3 manodhātu(1 五門引転+2 領受心)	*	*	*	*	*		5
12 欲界のみ	12=彼所縁 11(8 大異熟心+3 推度心)、笑起心 1 +20(12 不善+4 善智不相応+4 唯作智不相応) 無量を除くすべて  +5(4 智相応善+1 善神通) 阿羅漢道・果を除くすべて  +6(4 智相応唯作+1 唯作神通+1 意門引転) *一切の処 =43	*	*	*	*	*	*	6
	6 第二、四無色界心、上二界のみ +21(15 色界心+6 第一、三無色界心)施設のみ +8 出世間心、涅槃のみ=35						*	1
単所縁		2	2	2	2	2	35	
複所縁		46	46	46	46	46	43	

\*仏陀の一切智によって全てを所縁とすることができるが、衆生の能力に応じて悟りを得ていないものは無量所縁を取ることが出来ないし、それぞれの禪定や神通に達していなければそれぞれの所縁を対象に取れない。

§22 基 6

大地は生物、無生物などの基となって助けるように 6 基は心、心所が所依として生起するので基と呼ぶ。

色界地は五欲を嫌う離貪修習である禅定の結果として生まれる世界なので鼻、舌、身の基がなく眼基は仏陀を見るため、耳基は法を聞くために残っている。

無色界地には色は存在しない、大異熟心 8 は常に欲界を所縁とする、推度心 3、大異熟心 8 の彼所縁 11 は欲界速行、欲界有情、欲界所縁の条件があるので色界、無色界には生じない。

- それぞれの五基に依止 10 眼 2、耳 2、鼻 2、舌 2、身 2  
 常に心基に依止 33 瞋 2、眼界 3、推度 3、笑起 1、大異熟 8、色界心 15、預流道 1  
 時々心基に依止 42 貪 8、痴 2、意門引転 1、欲界善 8、欲界唯作 8、無色界善 4、無色界唯作 4  
 預流道を除く出世間心 7  
 常に心基に依止しない 4 無色界異熟 4

七界	vatthu 基	眼基	耳基	欲界のみ			心基 hadaya			基の合計
				鼻基	舌基	身基	常に	時々	完全に無し	
五識界	眼識界 cakkhuviññādhātu	○								1
	耳識界 sotaviññādhātu		○							1
	鼻識界 ghānaviññādhātu			○						1
	舌識界 jivhāviññādhātu				○					1
	身識界 kāyaviññādhātu					○				1
眼界 manodhātu (五門引転、領受)							○			1
意識界	五蘊界のみ生じる						○			1
	四蘊界と五蘊界に生じる							○		
	四蘊界のみ生じる								○	
心の合計		2	2	2	2	2	33	42	4	

	五蘊界のみ	五蘊界と四蘊界	四蘊界	基 vatthu
共一切心心所 7		○		
瞋、嫉、慳、悪作	○欲界のみ			常に心基 hadaya-
無量 Appamaññā 2	○			常に心基 hadaya-
残りの 39 心所	心基 hadaya-		無基	

#### IV 摂路分別 *Vīthi saṅgaha vibhāga*

陸路で目的地に向かうとき途中の町などを飛ばすことが無く順番に行くように、心決定 *citta niyama*（心の決まった法則）によって順番に生じる流れを路と呼ぶ。心と心は無間縁力（第8章）によって間を開けることなく連続して生じているが例外として滅尽定（第9章）に入定中と無想有情（第5章）の生において以外は連続して生じ続け阿羅漢となって入滅するまで続くのである。

路は二種類あり潜在的な心である離路（有分心の流れ）と五門路、意門路である。

離路については次の第5章で解説する。

心刹那とは、心が一回生・住・滅する時間（大刹那とも呼ぶ）、小刹那とは心刹那の長さの三分の一、色法の寿命は心刹那の17倍である

心の寿命＝心刹那 *cittakkhaṇa*＝大刹那：小刹那の3倍（生刹那 *uppāda*、住刹那 *ṭhiti*、滅刹那 *bhaṅga*、）

色法の寿命＝心刹那の17倍＝小刹那の51倍（1生刹那、49住刹那、1滅刹那、）

##### 【マンゴーの例えと路】

人がマンゴーの木の下で頭を覆って臥して眠っているときに、	有分	潜在的な心の流れ、離路
熟したマンゴーが枝から落ち音がする	有分動揺	所縁が有分に触れる
その人は音で目を覚まし	五門引転	ここから路が始まる
マンゴーを見る	眼識などの働き	
手を伸ばしてマンゴーを取る	領受	所縁を受け取る
熟しているか調べる	推度	所縁を調べる
熟していると判断する	確定	所縁を確定する
食べる	速行	所縁を味わう
口に残った唾液を飲み込む	彼所縁	同じ所縁をもう一度とる
また眠りに着く	有分	潜在的な心の流れ、離路

##### 【五識が起こる四つの要素】

1. 眼浄色 <i>Cakkhu pasāda</i>	色所縁 <i>rūpa</i>	光	<i>āloka</i>	作意 <i>manasikāra</i>
2. 耳浄色 <i>Sota pasāda</i>	声所縁 <i>sadda</i>	空間	<i>ākāsa</i>	作意 <i>manasikāra</i>
3. 鼻浄色 <i>Ghāna pasāda</i>	香所縁 <i>gandha</i>	風界	<i>vāyo dhātu</i>	作意 <i>manasikāra</i>
4. 舌浄色 <i>Jivhā pasāda</i>	味所縁 <i>rasa</i>	水界	<i>āpo dhātu</i>	作意 <i>manasikāra</i>
5. 身浄色 <i>kāya pasāda</i>	触所縁 <i>phoṭṭhabba</i>	地界	<i>pathavī dhātu</i>	作意 <i>manasikāra</i>

（地 *pathavī*、火 *tejo*、風 *vāyo*）

##### 【意識が起こる要素】

心基 *hadaya vatthu*（無色界を除く）法所縁（五所縁以外）作意 *manasikāra*

【境生起の六集】 §5

五門路（眼識路・眼門路、耳・・・、鼻・・・、舌・・・、身・・・）

- |                     |                             |                                |
|---------------------|-----------------------------|--------------------------------|
| 1. 極大所縁路 atimahanta | 極めて多い心刹那数がある所縁              | 彼所縁時分 1 tadārammaṇa vāra       |
| 2. 大所縁路 mahanta     | 多い心刹那数がある所縁                 | 速行時分 2 javana vāra 彼所縁無し       |
| 3. 小所縁路 paritta     | 少ない心刹那数がある                  | 所縁確定時分 6                       |
|                     | 何か見たような感じを意識するだけ            | voṭṭhabbana vāra 確定 2・3 回、速行無し |
| 4. 極小所縁路 atiparitta | 極めて少ない心刹那数がある<br>認識作用は行われない | 所縁空時分 6 mogha vāra 動揺 1・2 回    |

意門路（心基 hadaya vatthu 法所縁 dhammārammaṇa 意識 manoviññāṇa 作意 manasikāra）

- |                    |                     |                |
|--------------------|---------------------|----------------|
| 5. 明瞭所縁路 vibhūta   | はっきりした所縁（欲界速行の意門路）  | 彼所縁時分 5、速行時分 7 |
| 6. 不明瞭所縁路 avibhūta | はっきりしない所縁（欲界速行の意門路） | 速行時分 2         |

心の流れ方（五門路・五識路）

意門路・意識路は有分の後、8 番、確定心が意門引転心となり、速行、彼所縁と流れる

有分心（結生心、死心）不善異熟推度心 1、無因善異熟捨俱推度心 1、大異熟心 8、色界異熟心 5、  
（無色界異熟心 4） 19

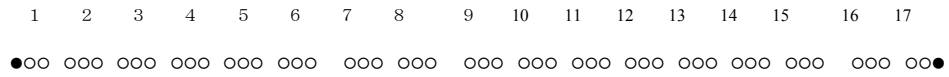
- |                           |   |
|---------------------------|---|
| 1. 過去有分心 atītabhavaṅga    | 五所縁が生じるがその刹那には認識することができないので過去有分と呼ぶ                |
| 2. 有分動揺心 bhavaṅgacalana   | 直ぐには有分の流れは途切れず動揺する                                |
| 3. 有分捨断心 bhavaṅgupaccheda | これも動揺しているが路の前の有分なのでこのように呼ぶ                        |
| 4. 五門引転心                  | 唯作心（捨俱）1 切り替えポイント                                 |
| 5. 五識                     | 眼、耳、鼻、舌、身 X 善・不善 10<br>五つの門に生じる認識する心 身識のみ喜俱と苦俱がある |
| 6. 領受心                    | 善・不善異熟心（捨俱）2                                      |
| 7. 推度心                    | 善異熟心 2（喜俱、捨俱）・不善異熟 1（捨俱）3                         |
| 8. 確定心 1.                 | （意門引転心）唯作心（捨俱）1                                   |
| 9. 速行① 2.                 | 善 21、不善 12、唯作 18（引転心 2 を除く）、果 4 の意思作用 55、         |
| 10. 速行② 3.                |   |
| 11. 速行③ 4.                |   |
| 12. 速行④ 5.                |   |
| 13. 速行⑤ 6.                |   |
| 14. 速行⑥ 7.                |   |
| 15. 速行⑦ 8.                |   |
| 16. 彼所縁 9.                | 不善異熟推度心 1、無因善異熟推度心 2、大異熟心 8、11                    |
| 17. 彼所縁 10.               |   |
- 有分心

路心図表 75 路=15×五識

眼識路 15

色の寿命 5 1 小刹那=生刹那 1 + 住刹那 4 9 + 滅刹那 1 = 1 7 心刹那×3 小刹那

極大所縁路



・・・有分) 一過一動一捨一五一眼一領一推一確一速一速一速一速一速一速一速一速一彼一彼一 (有分・・・

第一大所縁路 2

・・・有分) 一過一過一動一捨一五一眼一領一推一確一速一速一速一速一速一速一速一速一有 (有分・・・

第二大所縁路 3

・・・有分) 一過一過一過一動一捨一五一眼一領一推一確一速一速一速一速一速一速一速一速一 (有分・・・

第一小所縁路 4

・・・有分) 一過一過一過一過一動一捨一五一眼一領一推一確一確一確一有 (有分・・・

第二小所縁路 5

・・・有分) 一過一過一過一過一過一動一捨一五一眼一領一推一確一確一確一有 (有分・・・

第三小所縁路 6

・・・有分) 一過一過一過一過一過一過一動一捨一五一眼一領一推一確一確一確一有 (有分・・・

第四小所縁路 7

・・・有分) 一過一過一過一過一過一過一過一動一捨一五一眼一領一推一確一確一確一有 (有分・・・

第五小所縁路 8

・・・有分) 一過一過一過一過一過一過一過一過一動一捨一五一眼一領一推一確一確一確一 (有分・・・

第六小所縁路 9

・・・有分) 一過一過一過一過一過一過一過一過一過一動一捨一五一眼一領一推一確一確一 (有分・・・

第一極小所縁路 10

・・・有分) 一過一過一過一過一過一過一過一過一過一過一動一動一有 (有分・・・

第二極小所縁路 11

・・・有分) 一過一過一過一過一過一過一過一過一過一過一過一動一動一有 (有分・・・

第三極小所縁路 12

・・・有分) 一過一過一過一過一過一過一過一過一過一過一過一過一動一動一有 (有分・・・

第四極小所縁路 13

・・・有分) 一過一過一過一過一過一過一過一過一過一過一過一過一過一動一動一有 (有分・・・

第五極小所縁路 14

・・・有分) 一過一過一過一過一過一過一過一過一過一過一過一過一過一過一動一動一有 (有分・・・

第六極小所縁路 15

・・・有分) 一過一過一過一過一過一過一過一過一過一過一過一過一過一過一過一動一動一 (有分・・・

意門路表

明瞭所縁路（彼所縁時分）

1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12  
○○ ○○○ ○○○ ○○○ ○○○ ○○○ ○○○ ○○○ ○○○ ○○○ ○○○ ○○○ ○○○

・・・有分）一動一捨一意一速一速一速一速一速一速一速一速一彼一彼一（有分・・・

不明瞭所縁路（速行時分）

1 2 3 4 5 6 7 8 9 10  
○○ ○○○ ○○○ ○○○ ○○○ ○○○ ○○○ ○○○ ○○○ ○○○ ○○○

・・・有分）一動一捨一意一速一速一速一速一速一速一速一速一（有分・・・

第一明瞭所縁路

1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17  
●○○ ○○○ ○○○ ○○○ ○○○ ○○○ ○○○ ○○○ ○○○ ○○○ ○○○ ○○○ ○○○ ○○○ ○○○ ○○○ ○○○ ○○○ ●

・・・有分）一過一動一捨一意一速一速一速一速一速一速一速一速一彼一彼一有一有一有一有一（有分・・・

第二明瞭所縁路

1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17  
●○○ ○○○ ○○○ ○○○ ○○○ ○○○ ○○○ ○○○ ○○○ ○○○ ○○○ ○○○ ○○○ ○○○ ○○○ ○○○ ○○○ ○○○ ●

・・・有分）一過一過一動一捨一意一速一速一速一速一速一速一速一速一彼一彼一有一有一有一有一（有分・・・

第三明瞭所縁路

1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17  
●○○ ○○○ ○○○ ○○○ ○○○ ○○○ ○○○ ○○○ ○○○ ○○○ ○○○ ○○○ ○○○ ○○○ ○○○ ○○○ ○○○ ○○○ ●

・・・有分）一過一過一過一動一捨一意一速一速一速一速一速一速一速一速一速一速一彼一彼一有一有一有一（有分・・・

第四明瞭所縁路

1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17  
●○○ ○○○ ○○○ ○○○ ○○○ ○○○ ○○○ ○○○ ○○○ ○○○ ○○○ ○○○ ○○○ ○○○ ○○○ ○○○ ○○○ ○○○ ●

・・・有分）一過一過一過一過一動一捨一意一速一速一速一速一速一速一速一速一速一速一彼一彼一有一（有分・・・

第五明瞭所縁路

1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17  
●○○ ○○○ ○○○ ○○○ ○○○ ○○○ ○○○ ○○○ ○○○ ○○○ ○○○ ○○○ ○○○ ○○○ ○○○ ○○○ ○○○ ○○○ ●

・・・有分）一過一過一過一過一過一動一捨一意一速一速一速一速一速一速一速一速一速一速一速一速一彼一彼一（有分・・・

夢による路 無記時分 (abyākata vāra)

・・・有分）一動一捨一意一意一意一（有分・・・



安止速行の意門路

1. 禪の路

遅通達者

近行→ 安止

・・・有分－動揺－捨断－意門－遍作－近行－随順－種姓－禪－有分・・・

速通達者

近行→ 安止

・・・有分－動揺－捨断－意門－近行－随順－種姓－禪－有分・・・

2. 道の路

遅通達者

近行→ 安止

・・・有分－動揺－捨断－意門－遍作－近行－随順－種姓－道－果－果－有分・・・

速通達者

近行→ 安止

・・・有分－動揺－捨断－意門－近行－随順－種姓－道－果－果－果－有分・・・

3. 果定の路

遅通達者

近行→ 安止

・・・有分－動揺－捨断－意門－遍作－近行－随順－種姓－果－果－・・・

速通達者

近行→ 安止

・・・有分－動揺－捨断－意門－近行－随順－種姓－果－果－果－・・・

4. 滅尽定の路

九禪定を自在にした不還、阿羅漢のみ入定でき、心が停止して業生色、時節生色、食生色のみが生じ続けている特殊な禪定である。

1. 禪の路のとおり初禪に入り出定後、観察路が生じ、その後、出定した禪支や心を意門路において無常、苦、無我をヴィパッサナー瞑想で観察し、次に第二禪定に入定し同じように第八禪まで入定を繰り返す。その後、①持ち物の安全②サンガに呼ばれるか予測③仏陀に呼ばれるか予測④自分の寿命などを決意 (adhiṭṭhāna) し、第九禪定に入定し安止禪が2心刹那生じた後、心の流れと心生色が停止した滅定に入定する。最高7日間まで入定することができ、出定した瞬間にそれぞれの不還果、阿羅漢果が1心刹那生じ有分に落ちる。

-1...-v...-2...-v-3...-v-4...-v-5...-v-6...-v-7...-v-8...-決-9-9-滅...最高7日間...-果-有-

1-9 =第1禪定から第9禪定(色界禪5、無色界禪4)

v =意門路(ヴィパッサナーで無常、苦、無我を観察)

§17 受分別と人分別の組み合わせ表

近行定速行心 upacāra samādhi javana citta	大界速行心 1 8				出世間速行心 4 0						受による分別	人による分別
	善心		唯作		4 道		3 有学果		1 無学果			
	喜受 4 somanassa ve	捨受 5 upekkhā ve	喜受 4 somanassa ve	捨受 5 upekkhā ve	喜受 16 somanassa ve	捨受 4 upekkhā ve	喜受 12 somanassa ve	捨受 3 upekkhā ve	喜受 4 somanassa ve	捨受 1 upekkhā ve		
大善 x 喜俱 x 智相応	*				*		*				3 2	4 4
大善 x 捨俱 x 智相応		*				*		*			1 2	
大唯作 x 喜俱 x 智相応			*						*		8	1 4
大唯作 x 捨俱 x 智相応				*						*	6	

彼所縁の決定

異熟による法

不好所縁

不善異熟

五識・領受・推度・彼所縁（捨俱推度 1）

好所縁（中好）

善異熟

五識・領受・捨俱推度・彼所縁（捨俱推度 1・捨俱大異熟 4）

極好所縁

善異熟

五識・領受・喜俱推度・彼所縁（喜俱推度 1・喜俱大異熟 4）

§20 阿羅漢は異熟も速行も不顛倒

不好所縁

不善異熟

五識・領受・推度 【捨俱唯作速行】 彼所縁（捨俱推度 1）

好所縁（中好）

善異熟

五識・領受・捨俱推度 【捨俱唯作速行】 彼所縁（捨俱推度 1・捨俱大異熟 4）

極好所縁

善異熟

五識・領受・喜俱推度 【喜俱唯作速行】 彼所縁（喜俱推度 1・喜俱大異熟 4）

§21 客有分

喜俱大異熟心 4 で生れた人が瞋恚速行の後、彼所縁が生じない場合、過去の欲界所縁を取って捨俱推度心 2 が客有分の働きをする。

§23 速行の決定

欲界速行	普通の時	6~7回
	死ぬ前、気を失いかけている時	5回
	仏陀の神通を現わしている時の観察路（雙神変）	4~5回
	智相応善、唯作速行（偏作、近行、随順、種姓）	遅通達者 4回
	この後、安止速行（近行、随順、種姓）	速通達者 3回
大界速行	初めて禅定を得た時	1回
	神通速行	1回
	滅尽定の第四無色禅（前の定）	2回
	得た定に入る	入る長さに応じて
出世間速行	道速行	1回
	滅尽定から出るときの果定（後の定：不還果、阿羅漢果）	1回
	道速行の道心に続く果速行	遅通達者 2回 速通達者 3回
	得た果定に入る	入る長さに応じて

§28 地による〔路心〕別

31 世界から心が無い世界である無想有情界を除く

路心 80（離路のみである色界異熟 5、無色界異熟 4 を除く）	欲界 11	色界 15	無色界 4	世界 30
瞋根 2、大異熟 8、鼻識 2、舌識 2、身識 2=16	*			11
眼識 2、耳識 2、眼界 3、推度 3、笑起 1、色善 5、色唯作 5、預流道 1=22	*	*		26
貪根 8、痴根 2、意門引転 1、大善 8、大唯作 8、無色善 4、無色唯作 4、一來以上の道 3、果 4=42	*	*	*	30
合計	80	64	42	

§29 【色界者の心】

道心以外の路心などと色界異熟心			三因者	預流果	一來果	不還果	阿羅漢果	人合計
不善 10	欲 8	悪見相応 4	*					1
		悪見不相応 4	*	*	*	*		4
	痴 2	疑相応	*					1
		掉挙相応	*	*	*	*		4
眼識 2、耳識 2、領受 2、推度 3、引転 2 = 1 1			*	*	*	*	*	5
大善速行 8			*	*	*	*		4
大唯作速行 9 (8+笑起 1)							*	1
大界善速行 (色善 5、無色善 4)			*	*	*	*		4
大界唯作速行 (色界唯作 5、無色界唯作 4)							*	1
*色界異熟 5 (結生などのため)			*	*	*	*	*	5
預流果				*				1
一來果					*			1
不還果						*		1
阿羅漢果							*	1
色界人の得られる心			43	39			35	
無色界人の得られる心			27	23			18	

【無色界者の心】

無色界では眼識 2、耳識 2、領受 2、推度 3、五門引転 1=10 + (色界善 5 + 色界異熟 5) = 20 を引き

1. 三因者  $43 - 20 + \text{無色異熟心 } 4 = 27$
2. 預流、一來、不還  $39 - 20 + 4 = 23$
3. 阿羅漢  $35 - 20 + 4 - 1 (\text{無色界では笑起心は生じない}) = 18$

〈地・人の別による心〉

欲界心 54	悪趣無因者	二因者 善趣無因者・	三因の凡夫	一來果 預流果・	不還果	阿羅漢果
無禪人の欲界地	37	41	45	41	39	35
有禪人の欲界地 (+ 9)	X	X	54	50	48	44

## V 摂離路分別 Vīthimutta saṅgaha vibhāga

潜在的な心である有分心の流れを離路と呼び、それを主に説かれる章であるから摂離路分別という。

### §3 欲界地 11

離善地 4 apāya bhūmi (悪趣 duggati)

普通、善行をなすことから離れているので離善地と呼ぶ。人、天、涅槃の幸せを得るため善行をなすことが出来ず、不善業を多くなす処である。

地獄 niraya 楽が得られず、苦ばかり受ける世界を呼ぶ。

八大地獄 aṭṭha mahāniraya

等活地獄 saṃjīva	何度も蘇生して同じ苦しみを受ける
黒縄地獄 kāḷa sutta	大工が黒縄で線を引いて木材を切るように、獄卒が鉄縄で線を引き切り刻み衆生を苦しめる
圧縮地獄 saṅghāta	二つの山に圧縮されて苦しみを受ける
叫喚地獄 roruva	熱い煙や蒸気によって苦しみ泣き叫ぶ
大叫喚地獄 mahāroruva	熱い煙や蒸気によって苦しみ大変泣き叫ぶ
焦熱地獄 tāpana	炎に焼かれ串刺しにされて苦しむ
大焦熱地獄 mahātāpana	炎に焼かれ串刺しにされて大変苦しむ
無間地獄 avīci	他の地獄では苦しみが途切れることがあるが無間地獄は炎、苦しみに間が無く受け続け、衆生と衆生の隙間もない

畜生 tiracchāna yoni

人、天のように道・果・涅槃という上に向かうことが出来ず普通、地獄などの下のほうへ行く動物、昆虫など

餓鬼 petti visaya

普通、森、山、川、墓地などに住んでおり何年も飲まず食わずで餓えて苦しんでいる衆生

阿修羅 asura kāya

餓鬼の一種の阿修羅、ガンジス川の岸で水を捜し求めて飲もうとすると乾いてしまい飲むことが出来ずに苦しんでいる(蘊分別)  
それとは別に

神の一種の阿修羅：帝釈天と戦うような神

墮処の阿修羅：四大王天に属する地神などを頼って生きている神や昼間は幸せを享受し夜には悪業の苦しみを受ける衆生

欲界善趣地 7 Kāma sugati bhūmi

人界 manussā

道・果・涅槃を得る善業から悪業なら五無間業までなすことが出来る衆生で強い心を持っている

善業、悪業を知ることが出来るので人と呼ぶ

世界の始まりの王の名前がマヌ王といい、その名より manussā と呼ぶ

四大王天 Cātumahārājikā

持国 Dhataratṭha、増長 Virūḷhaka、広目 Virūpakka、多聞 Vessavana, Kuvera を四天王という。  
その四天王に支配されている天界を四天王処地という。山、森、などの地神や墮処の阿修羅などは全てこの処地に属する。須弥山の中腹にあるといわれている。

三十三天 Tāvatiṃsā	33 人の青年が善行によって生まれ変わった処地、須弥山の頂上にあるといわれている。
夜摩天 Yāmā	色々な苦しみや心配などがない世界で色々な幸せに満たされている処地。天空にある処で須夜摩王 Suyāma が支配している。
都率天 Tusitā	色々な幸せや吉祥に満たさしており、好ましい所縁によって楽しんでいる天をいう。Santusita 王が支配している。
樂變化天 Nimamānaratī	自分の欲するものを化作して楽しむ天
他化自在天 Paranimitta vasavattī	自分の思い通りに他人が化作して楽しませる天

#### §4 色界地 16 Rūpāvacara bhūmi

禪定を得て五欲厭離する衆生が転生する六欲天より長寿・樂住などの徳によって優れた世界

**初禪地 Paṭhamajjhāna bhūmi** (三梵天は初禪地に雑って住する、火壞劫によって崩壊)

梵衆天 Brahma pārisajjā	大梵天に従う衆が住している世界
梵輔天 Brahma purohitā	大梵天を助ける梵天が住している世界
大梵天 Mahābrahmā	梵衆天、梵輔天より勝れた梵天が住する世界

**第二禪地 Dutiyajjhāna bhūmi** (三梵天は第二禪地に混ざって住する、水壞劫によって崩壊)

小光天 Parittābhā	上の 2 天より光が少ない梵天が住する世界
無量光天 Appamāṇābhā	体の光が無量である梵天が住する世界
發光天 Ābhassarā	稲妻のように光を發する梵天が住する世界

**第三禪地 Tatiyajjhāna bhūmi** (三梵天は第三禪地に混ざって住する、風壞劫)

小淨光天 Paritta subhā	上の 2 天より淨光が少ない梵天が住する世界
無量淨光天 Appamāṇa subhā	体の淨光が無量である梵天が住する世界
遍淨光天 Subha kiṇhā	淨光が遍く満ちている梵天が住する世界

**第四禪地 Catutthajjhāna bhūmi** (二梵天は第五禪地に混ざって住する、壞劫によって崩壊することが無い)

広果天 Vehapphalā	広大な結果を有する梵天が住する世界
無想有情天 Asaññā sattā	想厭離の修習によって心・心所がなく色蘊（命九集）のみの梵天が住する世界

#### 淨居地 Suddhāvāsa bhūmi

煩惱を清淨にした不還果、阿羅漢道・果の居住であるので淨居天と呼ぶ、過去に修習した五力によって生まれる世界が変わる

不捨天地 Avihā	信	自分が得た天宮などを一瞬も捨てることなく千大劫の間住むことが出来る世界
無熱天地 Atappā	精進	何の心配もない大変平和な世界
善現天地 Sudassā	念	清らかな目を持ち幸せに見ていることが出来る世界
善見天地 Sudassī	定	大変清らかな眼識を持ち自然の目と知恵の目によって他を幸せに見ていることが出来る世界
無劣天地 Akaniṭṭhā	慧	大変幸せな世界でいかなる点でも劣ったものが無い世界

#### §5 無色界地 4 Arūpāvacara bhūmi

色法がなく名蘊のみが生滅している状態を無色界地と呼ぶ。

空無辺処地、識無辺処地、無処有処地、非想非非想処地

結生異熟心		地	寿命	
非想非非想所異熟心	四 無 色 界 地	非想非非想処地	84,000	
無処有処異熟心		無処有処地	60,000	
識無辺処異熟心		識無辺処地	40,000	
空無辺書異熟心		空無辺処地	20,000	
第五色界異熟心	十 六 色 界 地	無劣天地 慧 (浄居地:不還果、阿羅漢道・果のみ)	16,000	各天界で の寿命
		善見天地 定 (浄居地:不還果、阿羅漢道・果のみ)	8,000	
		善現天地 念 (浄居地:不還果、阿羅漢道・果のみ)	4,000	
		無熱天地 精進 (浄居地:不還果、阿羅漢道・果のみ)	2,000	
		不捨天地 信 (浄居地:不還果、阿羅漢道・果のみ)	1,000	
広果天・無想有情天 (命九集・想厭離)		500		
第四色界異熟心 第二、三色界異熟心 第一色界異熟心		小浄・無量・遍浄光天 (風壊劫)	16, 32, 64	
		小・無量・発光天 (水壊劫)	2, 4, 8大劫	
		梵衆天・梵輔天・大梵天 (火壊劫)	1/3, 1/2 1阿僧祇劫(64中劫)	
大異熟心 8		七 欲 界 善 趣 地	他化自在天	
	樂變化天		23億0400万年	8000
	都率天		5億7600万年	4000
	夜摩天		1億4400万年	2000
	三十三天		3600万年	1000
四大王天	900万年		500	
大異熟心 8 +無因善異熟捨俱推度		人界	75年	
不善異熟捨俱推度	四 惡 趣 地	畜生界・餓鬼界・阿修羅衆		
		等活地獄	*四大王天×360×500年	
		黒繩地獄	三十三天×360×1000年	
		圧縮地獄	夜摩天×360×2000年	
		叫喚地獄	都率天×360×4000年	
		大叫喚地獄	樂變化天×360×8000年	
		焦熱地獄	他化自在天×360×16000年	
		大焦熱地獄	中劫の1/2	
		無間地獄	中劫	

\*四大王天の寿命 900 万年=人間の寿命 50 年が 1 日×1 年 360×天界の寿命 500 年 (30 日×12 ヶ月で 1 年と計算)

\*\*等活地獄寿命=四大王天の寿命 900 万年×360×500 年

§6 地・人によるサンガハ・ガーター

31 世界		離善地 4	人・四大王天 2	残り欲界天 5	広果天まで 10	無想有情天 1	浄居天 5	無色界地 4	地の数
有情 11+1									
凡夫 4	悪趣無因 1	*							4
	善趣無因 1		*			*			3
	二因 1		*	*					7
	三因 1		*	*	*			*	21
聖者 8	預流道 1		*	*	*				17
	預流果から不還道 4		*	*	*			*	21
	不還果、阿羅漢道、果 3		*	*	*		*	*	26
地において人の数		1	11	10	9	1	3	8	214
詳細合計		4	22	50	90	1	15	32	

寿劫 **āyukppa**

人界の寿命 仏陀の時代の寿命を 100 歳とし、100 年に 1 歳ずつ減る（仏陀は寿命が減る時代に現れる）  
 現在寿劫 75 年  $100 - (2500 \div 100) = 75$

中劫 **antarākappa**

減劫 人寿阿僧祇歳より 100 年に 1 歳ずつ減少 10 歳まで  
 増劫 人寿 10 歳より世代ごとに倍増 人寿阿僧祇歳まで  
 減劫 + 増劫 = 中劫

\*阿僧祇とは数え切れないほどの大きな数の意味

阿僧祇劫 **asaṅkheyyakappa**

阿僧祇劫 = 中劫 × 64

大劫（世界）**mahākappa**

阿僧祇劫（中劫 × 64） × 4

成劫 *vivaṭṭa kappā*、 世界が出来上がっていく劫  
 住劫 *vivaṭṭatṭhāyī kappā*、 世界が出来上がった後、維持されている劫  
 壊劫 *saṃvaṭṭa kappā*、 世界が火、水、風などで壊れていく劫  
 空劫 *saṃvaṭṭatṭhāyī kappā* 世界が崩壊した後何も無い劫  
 芥子劫 盤石劫（ばんじゃくこう）



## §16 業の四集 Kamma catukka

### 作用による四業

令生業 Janaka kamma	結生、生起時にこの業が結果を与える
支持業 Upatthambhaka kamma	支持するだけ（自身では結果は起こせない）
妨害業 Upapīlaka kamma	他の業を邪魔する業
殺害業 Upaghātaka kamma	他の業を止め、自らの業を生じさせる

### 異熟をあたえる順序による四業

重業 Garuka-kamma	悪業（五無間業*） 善業（禪定）
近業 Āsanna-kamma	死の間近に起こる心によって作る業
久習業 Āciṇṇa-kamma	習慣化された業
已作業 Kaṭattā-kamma	過去生の業と上記以外の業

\*五無間業とは①母を殺す、②父を殺す、③阿羅漢を殺す、④仏身から血を出させる（註：悪意を持って誰も仏身から血を出させることは出来ず血豆であると註釈されている）、⑤サンガを分裂させる（註：戒壇において同時に羯磨儀規を行う）

### 異熟時による四業

現法受業 Diṭṭhadhamma-vedanīya	1 番目の速行心が業となると今生に結果を与える
次生受業 Upapajja-vedanīya	7 番目の速行心が業となると次生に結果を与える
後後受業 Aparāpariya-vedanīya	2～6 番目の速行心が業となると次次生から涅槃に入るまでに結果を与える
既有業 Ahosi	結果を与えない業

・・・有分）一動一意一速一速一速一速一速一速一速一速一彼一彼一（有分・・・

1 2 3 4 5 6 7

### 異熟処による四業

不善業 12 Akusala 非難され苦しみの結果を与える業  
(条件が揃うと離善地に行く道となる業になるということ業道と言う)

§18 身業 kāya kamma ほとんどの場合は身業によって行われる

殺生 paṇātipāta ①有情であること。②有情と知ること。③殺意があること。④身・語によって加行があること。⑤その加行によって死ぬこと。（その衆生が徳が高いほど業が重くなる）

偷盜 adinnādāna ①他人のものであること②他人のものを知ること。③盗む意思があること。④身・語によって加行があること。⑤実際に盗むこと。（盗んだ物と価値と被害者の徳によって業の重さが変わる）

邪欲行 kāmesu micchācāra ①行すべきでない男か女であること。②性交の意思があること。④身加行があること。⑤享受すること。

§19 口業 vacī kamma ほとんどの場合は口業によって行われる

妄語 musāvāda ①間違っていること。②誤解させたい意思があること。③身・語によって加行があること。  
④それによって相手が誤った認識をすること。

離間語 piṣuṇavāca ①仲の良い二人がいること。②二人の仲を裂いて自分に好意を向けようという意思がある  
こと。③身・語によって加行があること。④それによって実際に仲が引き裂かれること。

僞悪語 pharusavāca ①怒ること。②言われる相手のいること。③身・語によって加行があること。

綺語 samphappalāpa ①無益な言葉。②身・語によって加行があること。③その無益の話をまともに受け取る  
こと。

§20 意業 mano kamma

貪欲 abhijjhā ①他人の財物であること。②自分のものにしたいと思すること。

瞋恚 byāpāda ①相手の有情がいること。②その有情の死を望むほど瞋恚があること。

邪見 micchā diṭṭhi ①その教えが間違っていること。②自分の主張が正しいという確信があること。

非有見 natthika diṭṭhi 死後に異熟がないと考える邪見で断見を含む

無因見 ahetuka diṭṭhi 因が無いと考える邪見。衆生は時間がたてば勝手に浄まっていくという見

非作業見 akiriya diṭṭhi 善・不善業を認めない邪見、因果を共に否定する

§22 欲界善 8 kāmāvacara-kusala 布施 3 dāna、持戒 3 sīla、修習 4 bhāvanā

離-veramaṇī 悪業から離れる

身業 kāya kamma 離殺生、離偷盜、離邪欲行、

口業 vacī kamma 離妄語、離離間語、離僞悪語、離綺語

意業 mano kamma 離貪欲、離瞋恚、離邪見（無貪・無瞋・正見(無痴)）

§23 福事業 10 puññākiriya vatthu

三学	分別	自性	反対法
布施 与えること	回向：自分の得た功德を他の衆生に分け与える 随喜：他の回向を喜ぶ	無貪	嫉、慳
持戒 戒を守ること	恭敬：徳の高い人や年長者を尊敬して接する 作務：他の良い行いを利益を求めずに助ける	無瞋	貪、瞋
修習 心の成長の為にサマタ瞑 想、ヴィパッサナー瞑想を 実践すること	聞法：仏法や為になる教えを聞くこと 説法：仏法や為になる教えを説くこと 見直業：見を真直ぐにすること、正見を持つこと	無痴	痴

色界善 5 rūpāvacara-kusala 意業・修習

無色界善 4 arūpāvacara-kusala 意業・修習

§27 三因の勝などによる別

- 三因勝善 知恵を伴った心で業をなし、前後の心が善心によって囲む  
 三因劣善 知恵を伴った心で業をなし、前後の心が不善心によって囲む  
 二因勝善 知恵を伴わない心で業をなし、前後の心が善心によって囲む  
 二因劣善 知恵を伴わない心で業をなし、前後の心が不善心によって囲む

欲界善異熟心 16		三因勝善		三因劣善		二因劣善
		無行	有行	無行	有行	
大異熟智相応	無行 2	*				
大異熟智相応	有行 2		*			
大異熟智不相応	無行 2	*		*		
大異熟智不相応	有行 2		*		*	
無因善異熟心 8		*	*	*	*	*
結生心		三因 4		二因 4		無 1
計	マハーダッタ説 kecivāda	12	12	10	10	8
生起心	アヌルッタ説 samānavāda	16		12		8

§26 欲界業による異熟処

欲界業の結生異熟と地		
業	異熟	結果を得る地
掉挙を除く 11 不善心	不善異熟捨俱推度心	四離善地において結生
大善心 8	無因善異熟捨俱推度心と 大異熟心 8=9	欲界善趣地 7
欲界業の生起異熟と地		
不善心 12	不善異熟心 7	欲界 11 において生起異熟
	鼻、舌、身を除く不善異熟心 4	無想有情天を除く色界 15
大善心 8	無因善異熟心 8	欲界 11 において生起異熟
	大異熟心 8	欲界善趣 7 において生起異熟
	鼻、舌、身を除く無因善異熟心 5	無想有情天を除く色界 15

§32 死の生起 4

- |           |                  |            |
|-----------|------------------|------------|
| 1. 寿命が尽きる | āyukkhaya        | 芯がなくなり消える  |
| 2. 業が尽きる  | kammakkhaya      | 蠟がなくなり消える  |
| 3. 両者が尽きる | ubhayakkhaya     | 両方なくなり消える  |
| 4. 断業による死 | upacchedakakamma | 風が強く吹いて消える |

§33 臨終時の所縁の出現

	所縁	時	門
業 kamma	法所縁 (思心所=業)	過去	意門
業相 kamma nimitta	六所縁 色、声、香、味、触 (地、火、風) 7+法	過去(現在)	意門(六門)
趣相 gati nimitta	六所縁	現在	六門

§40 死・結生の順

死心		次の結生心		次生の世界	
無因死心	2	大異熟心 8、捨俱無因推度心 2	10	欲界 (4+1+6)	11
二因死心	4	大異熟心 8、捨俱無因推度心 2	10	欲界 (4+1+6)	11
欲界三因死心	4	10+色界異熟 5+無色界異熟 4	19	全て	31
無想有情死*	1	大異熟心 8	8	欲界善趣	7
色界死心	5	8+色界異熟 5+無色界異熟 4	17	悪趣 4+無想有情を除く	26
空無辺処死心	1	大異熟智相応 4+無色界異熟 4	8	欲界善趣 7+無色界 4	11
識無辺処死心	1	大異熟智相応 4+無色界異熟 3	7	欲界善趣 7+無色界 3	10
無所有処死心	1	大異熟智相応 4+無色界異熟 2	6	欲界善趣 7+無色界 2	9
非想非非想処死心	1	大異熟智相応 4+無色界異熟 1	5	欲界善趣 7+無色界 1	8

## VI 摂色分別 Rūpa saṅgaha vibhāga

完色 18 nipphannā rūpa 第一義的に存在する色

### §4 四大 4 mahābhūta

地 pathavī 堅さ軟らかさなどの地の要素  
水 āpo 湿性、つなぎ合わせる水の要素  
火 tejo 熱さ、寒さの火の要素  
風 vāyo 支える働きや動きの風の要素  
四大種以外を大種依止色 upādāya rūpa と呼ぶ

### §5 浄色 5 pasāda rūpa

眼 cakkhu 色所縁を認識するための眼の中にある物質  
耳 sota 声所縁を認識するための鼓膜の中にある物質  
鼻 ghāna 香所縁を認識するための鼻の中にある物質  
舌 jivhā 味所縁を認識するための舌の上にある物質  
身 kāya 触所縁を認識するための爪や髪の毛の先以外の身体中にある物質

### §6 境色 7 gocara rūpa (4 + 3)

色 rūpa 見る対象としての物質  
声 sadda 聞く対象としての物質  
香 gandha 嗅ぐ対象としての物質  
味 rasa 味わう対象としての物質  
触 phoṭṭabba (地、火、風) 触れる対象としての物質

§7 性色 2 bhāva rūpa 男女の別を生じさせる物質  
女性 itthibhāva、男性 purisabhāva(puṃbhāva)

§8 心色 1 hadaya rūpa 心色 hadaya vatthu 無色界以外において心が生じるときに依存する物質

§9 命色 1 jīvita rūpa 命根 jīvitindriya 身体全体に広がっている物質の寿命をつかさどる物質

§10 食色 1 āhāra rūpa 食色 (滋養素 ojā) 物質に含まれる栄養素

非完色 10 anipphannā rūpa 完色の特殊な状態を施説として色に入れる

§11 分断色 1pariccheda rūpa 虚空界 ākāsa 分子と分子の間に生じる空間 1

§12 表色 2 viññatti rūpa 意思表示をするときに生じる身、語の物質  
身表 kāya viññatti、語表 vacī viññatti 2

§13 変化色 5 vikāra rūpa (3+2)

- 色軽快性 rūpa lahutā 物質の軽やかな状態
- 色柔軟性 rūpa mudutā 物質の柔軟な状態
- 色適業性 rūpa kammaññatā 物質の身業、語業を為すのに適した状態
- + (表色 2)

§14 相色 4 lakkhaṇa rūpa

- 色積集 upacaya 結生から浄色が完成するまでの物質の生・住・滅の生の瞬間
- 色相続 santati 浄色の完成から死までの物質の生・住・滅の生の瞬間
- 色老性 jaratā 物質の生・住・滅の住の瞬間
- 色無常性 aniccatā 物質の生・住・滅の滅の瞬間

		4	依止色 upāda rūpa24									
色 rūpa 28 種		大種 mahā bhūta	浄色 pasāda	境色 gocara	性色 bhāva	心色 hadaya	命色 jivita	食色 āhāra	分断色 ākāsa	表色 viñatti	変化色 vikāra	相色 lakkhaṇa
完 色 18	地、火、風 (触) 3	★		★								
	水 1	★										
	眼、耳、鼻、舌、身 5		★									
	色、声、香、味 4			★								
	女性、男性 2				★							
	心色 1					★						
	命色 1						★					
食色 (滋養素) 1							★					
非 完 色 10	虚空界 (分断) 1							★				
	身表・語表 2								★	★		
	色軽快性、色柔軟性 色適業性 3										★	
	色積集、色相続、色老性、色無常性 4											★
合計		4	5	7	2	1	1	1	1	2	5	4

§26 色の起因

業・心・時節・食を四色起因という。

業によって男女の違いや美醜や健康などの違いをもたらし、心もストレスなどで病気になったり瞑想により悩みがなくなれば病気が治るなど違いをもたらし、暑さや寒さなどの温度によって身体が変化する違いをもたらし、食べ物に含まれる滋養素によって健康になったり、取り過ぎると病気になったりする。

- ①内色 Ajjhatika ⇔外色 bāhira、②基色 Vatthu ⇔非基色 avatthu  
 ③門色 Dvāra ⇔非門色 advāra、④根色 Indriya ⇔非根色 anindriya  
 ⑤麤色 oḷārika ⇔細色 sukhuma、近色 santike ⇔遠色 dūre 有對色 sappatigha⇔無有對色 appatigha  
 ⑥執受色 Upādinna⇔非執受色 anupādinna \*三生色、⑦有見色 Sanidassana ⇔無見色 anidassana  
 ⑧取境色 Gocaraggāhika ⇔不取境色 agocaraggāhika、⑨不簡別色 Avinibbhoga⇔簡別色 vinibbhoga

色 28 rūpa		内色	基色	門色	根色	麤色	執受色	有見色	取境色	不簡別色	
淨色 5 pasāda		★	★	★	★	★	★		★		7
心色 1 hadayavatthu			★				★				2
表色 2 viññatti				★							1
性色 2 bhāva 命色 1 jīvita = 3					★		★				2
境 色 7	色 1 rūpa					★	★	★		★	4
	声 1 sadda					★					1
	香 1 gandha					★	★			★	3
	味 1 rasa					★	★			★	3
	地 pathavī、火 tejo、風 vāyo、(触)					★	★			★	3
大 種	水 1 āpo						★			★	2
滋養 1 ojā							★			★	2
分斷 1 ākāsa							★				1
變化 3 lahutā mudutā kammaññatā 相 4 lakkaṇa = 7											
		5	6	7	8	12	18	1	5	8	
		23	22	21	20	16	10	27	23	20	
		外色	非基色	非門色	非根色	細色	非執受色*	無見色	不取境色	簡別	

§28～ §31

89 心 (神通 2 が重複)	心起因色	威儀の支持	表の起因	笑の起因	色の種類計
眼界 3、彼所縁 11、色界異熟 5=19	★				1
神通 2 以外の安止速行=26	★	★			2
確定 (意門引転) 1、瞋根 2、欲界捨速行 14、神通 2=19	★	★	★		3
欲界喜俱速行 13 (12+1)	★	★	★	★	4
無色異熟 4、2つの五識 10=14					
	75	56	32	13	

業生色などの自性

色 28 種 Kammaja rūpa, Cittaja rūpa, Utujja rūpa, Āhāra rūpa	業生色	心生色	時節生色	食生色	一生色など
浄色 5 pasāda 性色 2 bhāva 命色 1 jivita 心色 1 hadaya=9	★				1
表色 2 (身表 kāyaviññatti、語表 vacīviññatti)		★			1
声 1 sadda		★	★		2
色軽快性 lahutā、色柔軟性 mudutā、色適業性 kammaññatā 3		★	★	★	3
不簡別色 8 分断色 1=9	★	★	★	★	4
相色 4 lakkhaṇa (色積集、色相続、色老性、色無常性)					無
それぞれの理由によって生じた色の合計	18	15	13	12	

§39 §40

分断色 1 ākāsa を除いた時節生色 12 utu samuṭṭhāna rūpa 食生色 11 āhāraja rūpa Suddhaṭṭhaka Saddanavaka Lahutādi Saddalahutādi	純八集	声九集	軽快性など 11	声軽快性など 12	
不簡別色 8 avinibbhoga	★	★	★	★	2
声 1 sadda		★		★	Utu
色軽快性 lahutā、色柔軟性 mudutā、色適業性 kammaññatā 3			★	★	2
	8	9	11	12	



§37 業生聚 kammaja kalāpa 9 聚

分断色 1 (虚空) ākāsa を除いた業生色 17 kammaja rūpa	命 九 集	眼 十 集	耳 十 集	鼻 十 集	舌 十 集	身 十 集	女 性 十 集	男 性 十 集	基 十 集
不簡別色 8 avinibbhoga	★	★	★	★	★	★	★	★	★
命色 1 jīvita	★	★	★	★	★	★	★	★	★
眼 1 cakkhu		★							
耳 1 sota			★						
鼻 1 ghāna				★					
舌 1 jivhā					★				
身 1 kāya						★			
女性色 1 itthi bhāva							★		
男性色 1 purisa bhāva								★	
心 1 hadayavatthu									★
計	9	10	10	10	10	10	10	10	10

§38 心生聚 cittakalāpa 6 聚または 8 聚

分断色 1 (虚空) ākāsa を除いた心生色 14 citta rūpa	純 八 集	身 表 九 集	語 表 十 集	輕 快 十 一 集 な ど	身 輕 快 十 二 集 な ど	語 輕 快 十 三 集 な ど	声 九 集	声 輕 快 十 二 集 な ど
不簡別色 8 avinibbhoga	★	★	★	★	★	★	★	★
身表 1 kāyaviññatti		★			★			
語表 1 vacīviññatti			★			★		
声 1 sadda			★			★	★	★
色輕快性 lahutā、色柔軟性 mudutā、色適業性 kammaññatā 3				★	★	★		★
計 14	8	9	10	11	12	13	9	12

Kamma 業 §26、§27	Citta 心 §27	utu 時節 §32	Āhāra 滋養素 §33
不善 12 大善 8 色善 5=25 の過去の業  内処 業生色 18 を 結生心の生起から 生、住、滅の瞬間瞬間 生じる §44	2つの五識 10 無色異熟心 4 (阿羅漢の死心と 結生心をのぞく) 89-14=75 内処 心生色 15 を第一有分心から 心の生起の瞬間瞬間 生じる (例外、結生心、阿羅 漢の死心、住時、滅時)	四起因色聚の中の 寒冷時節、暑熱時節 2  内処、外処 時節生色 13 を結生心 の住から色の住のた びに途切れることな く	食べたときの食べ 物に含まれる滋養 素 oja  内処 滋養素色 12 を 食べた後内と外の 滋養素が混ざった 後の住から 滋養素の住のたび に途切れることな く

門路と色（一。。。一は心の一生、住、滅一）

一有 一動一捨 一五 一眼 一領 一推 一確 一速 一速 一速 一速一速 一速 一速 一彼 一彼  
。。。 。。。 。。。 。。。 。。。 。。。 。。。 。。。 。。。 。。。 。。。 。。。 。。。 。。。 。。。  
。生 1 刹那 ←住 4 9 刹那→ 滅 1 刹那。

死心路と最後の業生色（一。。。一は心の一生、住、滅一） §45

一有 一有 一有 一有 一動 一捨一五 一眼 一領 一推 一確 一速 一速 一速 一速 一速 一死  
。。。 。。。 。。。 。。。 。。。 。。。 。。。 。。。 。。。 。。。 。。。 。。。 。。。 。。。 。。。  
。生 1 刹那 ←住 4 9 刹那→ 滅 1 刹那。

## §49 涅槃について

次に出世間と言われ、四道智よって作証すべきものであり、道・果の所縁となる涅槃は、縫合と言われる渴愛から脱出しているの、涅槃と言われる。

Nibbāna = ni + vāna

それは自性としては寂滅の相 **Santi lakkhaṇa** としては一種であるが

[相に]基づく仮説によれば、有余涅槃界 **Saupādisesanibbāna** と無余涅槃界 **Anupādisesanibbāna** との二種がある。

現法涅槃 **diṭṭha dhamma nibbāna** 當来涅槃 **samparāyika nibbāna**

煩惱涅槃 **kilesa nibbāna** 蘊涅槃 **khandha nibbāna**

また行相の別による、空 **Suññatanibbāna** 無相 **Animittanibbāna** 無願 **Appaṇihitanibbāna** の三種がある

無我随観 <b>anattānupassanā</b>	⇒ 空解脱 <b>Suññata vimutti</b>
無常随観 <b>aniccānupassanā</b>	⇒ 無相解脱 <b>Animitta vimutti</b>
苦随観 <b>dukkhānupassanā</b>	⇒ 無願解脱 <b>Appaṇihita vimutti</b>

1. Taṇhāya asesa virāganirodha	渴愛が残り無く尽きること
2. Taṇhakkhaya	渴愛の尽滅
3. Rāgakkhaya, dosakkhaya, mohakkhaya	貪欲尽滅、瞋恚尽滅、痴尽滅
4. Bhavanirodha	生の滅尽
5. Dukkhanirodha	苦の滅尽
6. Asaṅkhata	どんな理由によっても作られない法
7. mutti, Vimutti	煩惱からの解脱
8. Dīpa	島、洲のような法
9. tāṇa	避難所、横になる場所
10. Leṇa	洞窟、隠れるところ
11. Parāyaṇa	頼りにする所、所趣処
12. Sacca	正しい
13. Sukha	幸せの
14. Santi	寂靜の
15. Paṇīta	勝れた
16. Dhuva	恒常
17. Amata, accuta	不死
18. Anuttara	無上
19. Gambhīra	深い
20. Duddasa	見がたい
21. aṇu, sukhuma	微細、精細

## VII 撰集分別 *Samuccaya saṅgaha vibhāga*

### 1 不善の撰

§1 実法 72 種

§2 心 1 *citta*、心所 52 *cetasika*、完色 18 *nippahanna rūpa*、涅槃 1 *nibbāna*

不善の撰、雑の撰、菩提分の撰、一切の撰と四種ある

不善の撰 *Akusala saṅgaha* 十種

§3 漏 4 *āsava* 化膿した傷口から膿が出るように貪などの不浄が六門から漏れ出る、強い酒のようなもの  
欲漏 *kāmāsava*、有漏 *bhavāsava*、見漏 *diṭṭhāsava*、無明漏 *avijjāsava*

§4 暴流 4 *ogha* 暴流が有情を飲み込んで命を奪うように輪廻において離善地まで運び去るようなもの  
欲、有、見、無明

§5 軛 4 *yoga* 有情を軛によって輪廻に結びつけるもの  
欲、有、見、無明

§6 繫 4 *gantha* 有情を鎖などで輪廻に繫ぐもの

貪欲の聚繫 *abhijjhā kāyagantha*、瞋恚の聚繫 *byāpāda kāyagantha*、

戒禁取の聚繫 *silabbataparāmāsa kāyagantha*、此実住著の聚繫 *idaṃ saccābhinivesa kāyagantha*

§7 固執 4 *upādāna* 蛇が蛙を捉えて離さないように固く執りつくもの

欲の固執 *kāmupādāna*、見の固執 *diṭṭhupādāna*、戒禁取の固執 *silabbatupādāna*、我説の固執 *attavādupādāna*

§8 蓋 6 *nīvaraṇa* 禅、道、果のなどだけでなく善心が生じることを蓋のように妨害するもの

欲貪の蓋 *kāmacchanda-*、瞋恚の蓋 *byāpāda-*、昏沈・睡眠の蓋 *thīna middha-*、

掉挙・悪作の蓋 *uddhacca kukkucca-*、疑の蓋 *vicikicchā-*

§9 随眠 7 *anusaya* 有情に常に付き随って潜在している煩惱

欲貪の随眠 *kāmarāgānusaya*、有貪の随眠 *bhavarāgānusaya*、瞋恚の随眠 *paṭighānusaya*、慢の随眠 *mānānusaya*、

見の随眠 *diṭṭhānusaya*、疑の随眠 *vicikicchānusaya*、無明の随眠 *avijjānusaya*

結 10 *saṃyojana* 五下分結は有情を欲界に結びつけるもの、五上分結は有情を上二界に結びつけるもの、経・論によって二種類ある

§10 経による結 欲貪 *kāmarāga-*、色貪 *rūparāga-*、無色貪 *arūparāga-*、瞋恚 *paṭigha-*、慢 *māna-*、見 *diṭṭhi-*、戒禁取 *silabbataparāmāsa-*、疑 *vicikiccha-*、掉挙 *uddhacca-*、無明 *avijjā-*

§11 論による結 欲貪 *kāmarāga-*、有貪 *bhavarāga-*、瞋恚 *paṭigha-*、慢 *māna-*、見 *diṭṭhi-*、戒禁取 *silabbataparāmāsa-*、疑 *vicikiccha-*、嫉 *issā-*、慳 *macchariya-*、無明 *avijjā-*

§12 煩惱 10 *kilesa* 心を汚し、煩わせ、悩ませる 10 種の不善心所

貪 *lobha*、瞋 *dosa*、無明 *moha*、見 *diṭṭhi*、慢 *māna*、疑 *vicikiccha*、無慚 *ahirika*、無愧 *anottappa*、

昏沈 *thīna*、掉挙 *uddhacca*

	不善の撰十種	漏 4 āsavā	暴流 4 ogha	軛 4 yoga	繫 4 gantha	固執 4 upādāna	六蓋 nīvaraṇa	七隨眠 anusaya	十結・經 samyojana	十結・論 samyojana	十煩惱 kilesa		
不善心所十四	貪	欲、有	欲、有	欲、有	貪欲身	貪欲身	欲貪	欲貪、有貪	欲貪、色貪、無色貪	欲貪、有貪	貪	10	
	瞋				瞋恚身		瞋恚	瞋恚	瞋恚	瞋恚	瞋	6	
	痴	無明	無明	無明			無明	無明	無明	無明	無明	8	
	見	見	見	見	戒禁取見身 此実住著身	見、戒禁取見 我語取		見	見 戒禁取見	見 戒禁取見	見	9	
	慢							慢	慢	慢	慢	4	
	疑						疑	疑	疑	疑	疑	5	
	嫉									嫉		1	
	慳									慳		1	
	無慚										無慚	1	
	無愧										無愧	1	
	昏沈 睡眠							昏沈、 睡眠				昏沈	2
	掉挙 惡作							掉挙、 惡作		掉挙		掉挙	3
			3	3	3	3	2	8	6	7	8	10	

## 2 雑の撰

善・不善・無記を混じえて示す撰

§15 因 6 *hetu* 貪、瞋、痴、無貪、無瞋、無痴（慧根）

§16 禪支 7 *jhānaṅga* 尋、伺、喜、樂（喜）、憂、捨、一境性

§17 道支 12 *maggāṅga* 善趣地や離善地にいく道であるから、その道を構成する支を道支と呼ぶ  
正見、正思惟、正語、正業、正命、正精進、正念、正定、邪見、邪思惟、邪精進、邪定  
自性として9、慧、尋、離3、精進、念、一境性、見

§18 根 22 *indriya*

眼根、耳根、鼻根、舌根、身根、（五基色）

女根、男根、（性色）

命根、（色命根、名命根）

意根、89 心

樂根、苦根、喜根、憂根、捨根、（五受）

信根、精進根、念根、定根、慧根、（五根）

未知を知ろうとする根（未知當地根）

*anaññātaññassāmītindriya*、 預流道に相應する慧

境界内を知る根（已知根）

*aññindriya*、 上3道、下3果に相應する慧

知り已っている根（具知根）

*aññātāvindriya* 阿羅漢果に相應する慧

§19 力 9 *bala* 敵に遭遇しても指揮官が動揺せず反って強固になるように、反対法に対して強く働く力

信力、精進力、念力、定力、慧力、慚力、愧力、無慚力、無愧力

反対法

信—不信 *asaddhiya*、精進—懈怠 *kosajja*、念—放逸 *muṭṭhassacca*、定—掉挙、慧—無明、無慚—慚、無愧—愧

§20 主・増上 4 *adhipati* 根と主は共に支配する意味があるが主は王に例えられ全てを支配し、根は大臣に例えられ自分の役割によって働く

意欲の主 *chandādhīpati*、精進の主 *viriyādhīpati*、心の主 *cittādhīpati*、観の主 *vīmaṃsādhīpati*

§21 食 4 *āhāra* 五蘊の相続に最も関与するもの

段食 *kabalīkāra*- 滋養素

触食 *phassa*- 89 心に相應する触心所

意の思食 *mano cetanā*- 89 心に相應する思心所

識食 *viññāṇa*- 89 心

	六因	七禪支	十二道支	二十二根	九力	四主・増上	四食	
貪	1							1
瞋	1							1
痴	1							1
無貪	1							1
無瞋	1							1
浄色 5、性 2				7				7
色命、名命				1				2
意欲						1		1
段、触、思、							3	3
心				1		1	1	3
慧（無痴）	1		1	4	1	1		5
見			1					1
尋		1	2					2
伺		1						1
離 3			3					3
喜		1						1
信				1	1			2
精進			2	1	1	1		4
念			1	1	1			3
一境性		1	2	1	1			4
受		3		5				2
慚、愧、 無慚、無愧					4			4
	6	5	9	16	9	4	4	

### 3. 菩提分の撰

§24 念住 4 身随観、受随観、心随観、法随観  
 （四念住法、身を不浄、受を苦、心を無常、法を無我と随観する）

§25 正勤 4

断断	uppannānaṃ pāpakānaṃ pahāya vāyāmo	已に生じた悪を遮断するための精進
律儀断	anuppannānaṃ pāpakānaṃ anuppadāya vāyāmo	未だ生じたことの無い悪を生じないための精進
随護断	anuppannānaṃ kusālānaṃ uppadāya vāyāmo	未だ生じたことの無い善が生じるための精進
修断	uppannānaṃ kusālānaṃ bhīyobhāvāya vāyāmo	已に生じた善が増大するための精進

§26 神足（成就の基礎）4 意欲 chandiddhi pāda、精進 viriyiddhi pāda、心 cittiddhi pāda、觀 vīmaṃsiddhi pāda 道、果、涅槃をもたらすための基礎となるものを成就の基礎という。大善 8、色界善 5、無色界善 4 に相応する意欲など。

§27 根 5 信根、精進根、念根、定根、慧根  
自らの領域を支配する働き。大・色界・無色界善心、唯作心、42 心に相応する信など

§28 力 5 信力、精進力、念力、定力、慧力  
反対法に対して確りとして揺れ動かされない力。大・色界・無色界善心、唯作心、42 心に相応する信など。

§29 覚支 7 念妙、択法妙（慧）、精進妙、喜妙、軽安妙、定妙、捨妙（中捨）  
道智を得るための支分を覚支という。自性は大・色界・無色界善心、唯作心、42 心に相応する慧など。

§30 道支 8 正見、正思惟、正語、正業、正命、正精進、正念、正定  
自性は大・色界・無色界善心、唯作心、42 心に相応する慧など。

	菩提分の 撰	念住 4	正勤 4	神足 4	根 5	力 5	覚支 7	道支 8	37
心 ・ 心 所	意欲			意欲					1
	信				信根	信力			2
	精進		断断 律儀断 随護断 修断	精進	精進根	精進力	精進妙	正精進	9
	念	身、受、 心、法			念根	念力	念妙	正念	8
	世間心			心					1
	喜						喜妙		1
	軽安						軽安妙		1
	一境性				定根	定力	定妙	正定	4
	慧			觀	慧根	慧力	択法妙	正見	5
	尋							正思惟	1
	正語							正語	1
	正業							正業	1
	正命							正命	1
中捨						捨妙		1	
	14	1	1	4	5	5	7	8	



#### 4. 一切の撰 ～44

心、心所、色、涅槃など一切の法を示すので一切の撰と呼ぶ。

§34 五蘊 蘊 khandha とは集まりの意味である

色蘊 rūpa- : 物質の集まり、受蘊 vedanā : 89心と相応する受心所、想蘊 saññā : 89心と相応する想心所、行蘊 saṅkhāra- : 思心所を代表とする 50心所、識蘊 viññāṇa- : 89心

五蘊を順番に皿、ご飯、おかず、料理人、食べる人に例えられる。涅槃は蘊に入らない。

§35 五執蘊 固執（貪、見）の所縁となる蘊を執蘊 upādānakkhandha という。ヴィパッサナー瞑想の所縁として説かれたもので出世間心、涅槃をのぞく。

色執蘊、受執蘊、想執蘊、行執蘊、識執蘊

§36 十二処 āyatana 路心が生じるための処であるから処という。内処と外処に分けられる。

内処 ajjhātika-眼処、耳処、鼻処、舌処、身処、意処、

外処 bahiddha-色処、声処、香処、味処、触処、法処

法処とは細色 16、心所 52、涅槃、

細色 16 = (水、性 2、心基、命色、食) + 10 非完色 anipphanna

§37 十八界 dhātu それぞれの自性を保持するというので界という。

眼界、耳界、鼻界、舌界、身界、色界、声界、香界、味界、触界、法界、

眼識界、耳識界、鼻識界、舌識界、身識界、意界、意識界、

眼識界は眼識 2、～身識界は身識 2、

意門は一般に有分心であるがここでは五門引転心、領受心 2、意識界は残り 76 心

§38 四聖諦 sacca 諦とは真理の意味である

苦聖諦 dukkha ariya sacca 三界に属する世間法が苦諦である。(貪心所を除く)

集聖諦 samudaya ariya sacca 苦しみの原因は渴愛(貪心所)である。

滅聖諦 nirodha ariya sacca 苦しみが滅した状態が涅槃である。

道聖諦 magga ariya sacca 苦しみの滅した状態である涅槃への道は\*勝義の八正道である。

\*\*出世間の道のみが道聖諦、世間の八正道は苦聖諦に入る。

\*道心と生起する勝義の八正道(慧、尋、離 3、精進、念、一境生)

\*\*道心生起 29(道心 1+28 心所)、果心生起 37(果心 1+36 心所)は四聖諦に含まない

名に迷っている、知恵の鋭い、簡明を好む人に五蘊を説き(名を四つに分けているので)

色に迷っている、知恵が普通、中を好む人に十二処を説き(色を 10 種および残りを法処に入れるので)

名色の両方に迷っている、知恵が鈍い、詳細を好む人に十八界を説く(名色の両方を詳しく説くので)

			五蘊	五執蘊	十二処	十八界	四聖諦
色 28	麤色 12	眼淨色	色蘊	色執蘊	眼処	眼界	苦聖諦
		耳淨色			耳処	耳界	
		鼻淨色			鼻処	鼻界	
		舌淨色			舌処	舌界	
		身淨色			身処	身界	
		色所縁			色処	色界	
		声所縁			声処	声界	
		香所縁			香処	香界	
		味所縁			味処	味界	
		触所縁 3			触処	触界	
	細色 16	法所縁			法処	法界	
心所 52	受心所	法所縁	受蘊	受執蘊	法処	法界	集聖諦
	想心所		想蘊	想執蘊			
	貪心所		行蘊	行執蘊			
	道心所 8						
	残り心所 41						
涅槃			X	X	法処	法界	滅聖諦
心 89	五識 10	眼識 2	識蘊	識執蘊	意処	眼識界 2	苦聖諦
		耳識 2				耳識界 2	
		鼻識 2				鼻識界 2	
		舌識 2				舌識界 2	
		身識 2				身識界 2	
	意界 3	五門引転・領受 2				意界 3	
	残り世間心 68	法所縁				意識界 76	
	出世間心 8					X	

## VIII 摂縁分別 Paccaya saṅgaha vibhāga

縁、縁所生、縁の力の三項目についての分別である。

縁 paccaya 原因の法。

縁所生 paccayuppanna 原因の法によって起こる結果の法。

縁の力 paccaya satti 原因の法が結果の法に与える力、新しく生じさせたり、既に生じている法を助けたりする。

縁起の仕方 paṭiccasamuppāda naya 縁によって縁所生が生じ、その縁所生が縁となって縁所生を生じさせるという関係の仕方を説いている。

発趣論の仕方 paṭṭhāna naya 縁と縁所生だけでなく更に縁の力も交えて詳しく説かれている。

分別論の縁起分別では縁起の仕方と発趣論の仕方を交えて説かれているがアビダンマッタサンガハでは理解しやすいように別々に説かれている。このテキストでは参考の為に分別論の縁起分別も簡略に示した。

### 縁起の仕方

「無明という縁から行が生じ、行という縁から識が生じ、識という縁から名色が生じ、名色という縁から六処が生じ、六処という縁から触が生じ、触という縁から受が生じ、受という縁から渴愛が生じ、渴愛という縁から固執が生じ、固執という縁から有が生じ、有という縁から生が生じ、生という縁から老死、愁、悲泣、苦、憂、悩が生じる。このようにして、この一切の苦蘊が生じる。」

- ① 無明 不善心と相応する痴  
四聖諦、前辺、後辺、前辺・後辺、十二縁起の 8 点についての無知
- ② 行 世間善心・不善心に相応する 29 の思  
善行 欲界善心 8、色界善心 5 と相応する思  
不善行 不善心と相応する 12 の思  
不動行 無色界善に相応する 4 の思
- ③ 識 結生時・生起時における世間異熟心 32  
善行を縁として欲界無因異熟心 8、大異熟心 8、色界異熟心 5 の 21 識  
不善行を縁とし不善無因異熟心の 7 識  
不動行を縁として無色界異熟心の 4 識
- ④ 名色 名＝異熟心と相応する心所 色＝業生色
- ⑤ 六処 眼、耳、鼻、舌、身の 5 色処と世間異熟心 32 の意処
- ⑥ 触 眼触、耳触、鼻触、舌触、身触、  
意触は二つの前五識を除いた世間異熟心 22 に相応する触

- ⑦ 受 眼触所生受、耳触所生受、鼻触所生受、舌触所生受、身触所生受、意触所生受
- ⑧ 渴愛 色愛、声愛、香愛、味愛、触愛、法愛 (貪根心と相応する貪心所)
- ⑨ 固執 欲、我説、習性行、見の四つの固執
- ⑩ 有 業有＝世間善心 17 と不善心 12 とに相応する 29 思  
起有＝業有より生じる世間異熟心、心所、業生色  
(欲有、色有、無色有)
- ⑪ 生 結生の刹那に生じる異熟心、心所、業生色
- ⑫ 老死 (愁、悲泣、苦、憂、惱)

§6 時 3 addha 過去時①②、現在時③～⑩、未来時⑪⑫

§7 支 12 aṅga①～⑫

§9 行相 20 ākārā ①②+⑧⑨⑩5、③④⑤⑥⑦5、⑧⑨⑩+①②5、⑪⑫=③④⑤⑥⑦5

§9 連結 3 sandhi 第一連結：行と識の間、第二連結：受と渴愛の間、第三連結：有と生の間

§9 合集 4 saṅkhepa 二十行相の四つの合集

§11 輪転 3 vaṭṭa

煩惱輪転 kilesa vaṭṭa : 無明、渴愛、固執

業輪転 kamma vaṭṭa : 行、業有

異熟輪転 vipāka vaṭṭa : 起有、識、名色、六処、触、受、生、老死

§12 根本 2 mūla 無明、渴愛 ①～⑦までが無明が主、⑧～⑫までが渴愛が主

§13 輪転の断絶と生起

無明と渴愛である二根本を阿羅漢道で捨断すれば、無始の輪転は滅し去る。

「無明の残り無い離貪・滅から行が滅し、行の滅から色が滅し・・・生の滅から老死、愁、悲泣、苦、憂、惱が滅する。このようにしてすべての苦蘊が滅する。」

## 2. 発趣論の仕方

### 二十四因縁の略説

因縁、所縁縁、主縁、無間縁、極無間縁、俱生縁、相互縁、依縁、親依縁、前生縁、後生縁、習行縁、業縁、異熟縁、食縁、根縁、禪縁、道縁、相応縁、不相応縁、有縁、非有縁、離去縁、不離去縁

1. 因縁 *hetu paccayo* 樹の根のように水分や養分を吸い取ってその樹を大きく成長させるように因である貪、瞋、痴、無貪、無瞋、無痴が樹の根のように、関係する名法、色法を支えたり生じさせたりする縁。
2. 所縁縁 *ārammaṇa paccayo* 杖や手すりが見えない人や病人の助けになるように、色、声、香、味、触、法という六所縁を頼って心、心所である名法が生じるように支える縁。
3. 主縁 *adhipati paccayo* 世界で並ぶものがない転輪王は1人で世界を支配し、支配下の周辺の王たちを従わせるように色、声、香、味、触、法という所縁が主となったとき名法を自分の欲するように生じさせたり支えたりする縁力（所縁主縁）。意欲、精進、心、慧の法が主となったとき共に生じる名色法を自分の欲するように生じさせたり支えたりする縁。（俱生主縁）
4. 無間縁 *anantara paccayo* 転輪王が崩御したとき、間を空けず直ぐに皇子が王権を継ぐように、前に生じる名法が滅した後、後に生じる名法が間を空けずに生じさせる縁。（令生縁）
5. 極無間縁 *samanantara paccayo* 転輪王が出家したとき、極めて間を空けず直ぐに皇子が王権を継ぐように、前に生じる名法が滅した後、後に生じる名法が極めて間を空けずに生じさせる縁。（令生縁）
6. 俱生縁 *sahajāta paccayo* 蠟燭の火は点くと同時に光を生じさせたり支えたりするように、四名蘊（受、想、行、識）、四大（地、水、火、風）、結生心、心所、心基などは自ら生じると同時に縁所生を生じさせたり支えたりする縁。
7. 相互縁 *aññamañña paccayo* 三脚の足がお互いに支え合って立っているように四名蘊（受、想、行、識）、四大（地、水、火、風）、結生心・心所と心基などは自ら生じると同時に縁と縁所生は相互に支える縁。
8. 依縁 *nissaya paccayo* 樹が生える時に大地が拠り所となるように、絵を描くときにキャンバスが絵の具の拠り所となるように四名蘊（受、想、行、識）、四大（地、水、火、風）、結生心・心所、心基；眼識、耳識、鼻識、舌識、身識などは対応する基などに依止して生じる。基は依止されることによって生じさせたり支えたりする縁。
9. 親依縁 *upanissaya paccayo* 雨は全ての有情や物質に極めて強い拠り所となって縁となるように信、戒、聞法、布施、慧、欲愛、瞋恚、慢、見、身楽、身苦、時節、食、人、住居などは善、不善、無記法などを生じさせるために極めて強い拠り所となることによって生じさせたり支えたりする縁。

10. 前生縁 purejāta paccayo 地球上の生命は前に生じ今も存在している地球に生きているように、色、声、香、味、触の五所縁；眼基、耳基、鼻基、舌基、身基、心基の六基は関係する心へ前に生じ現在も在ることによって生じさせたり支えたりする縁。
11. 後生縁 pacchājāta paccayo 既に成長している樹を後から水をかけて維持成長を助けるように心、心所、名法などは既に生じている色法を後から生じることによって支える縁。（支持縁）
12. 習行縁 āsevana paccayo 学問は前に学んだことが後に学ぶ理解の助けとなるように、前に生じた善、不善、唯作速行心は後に生じた善、不善、唯作速行心へ同じ性の心を何度も生じさせる縁。（令生縁）
13. 業縁 kamma paccayo 樹の種は大きな樹の成長の縁となるように、俱生の思心所、各刹那に生じる思心所などは関係する名・色・五蘊を促すように生じさせたり支えたりする縁。
14. 異熟縁 vipāka paccayo 居心地の良い大樹の影の下でそよ風に吹かれて休んでいる人は気を使うことなくのんびりしているように、善業、不善業によって生じる異熟蘊などはそれぞれの自性と同じく、お互いに生じさせたり支えたりする縁。
15. 食縁 āhāra paccayo あばら屋が崩れないように支えている木のように食物の中にある滋養素、段食色は身体を生じさせたり支えたりする縁、触、思、識という名食3種は共に生じる名・色に生じさせたり支えたりする縁。
16. 根縁 indriya paccayo 各省庁の大臣が自分の管轄する省庁を指揮管理するように眼、耳、鼻、舌、身、心などの根法は共に生じる名・色法へ支配することによって生じさせたり支えたりする縁。
17. 禪縁 jhāna paccayo 山の頂上、樹の天辺に立つ人は周りの景色が良く見えるので、下にいる人に上で見ることを勧めるように、尋、伺、喜、受、一境性、禪支法などは共に生じる名・色法を遍などに集中するように生じさせたり支えたりする縁。
18. 道縁 magga paccayo 道を歩む人が目的地にたどり着くように、正道、邪道などは共に生起するそれぞれの名・色法などを悪趣、善趣へ向かわせるように生じさせたり支えたりする縁。
19. 相応縁 sampayutta paccayo バター、蜂蜜、砂糖、ごま油などをしっかりと混ぜた後、それぞれの味を分けて知ることが出来ないように、四名蘊は所縁を取るとき別々の性質がはっきりせずに一緒に所縁を取るように生じさせたり支えたりする縁。（心所相4：同起、同滅、同所縁、同基が条件）
20. 不相応縁 vippayutta paccayo 甘味、酸味、辛味、苦味、渋味、塩味など一緒の料理に味付けされていても別々に働くように、眼基、耳基、鼻基、舌基、身基、心基、結生心、心所などの名・色法は同時に生じてもお互いに相応せず生じさせたり支えたりする縁。

21. 有縁 atthi paccayo 高い山は存在することにより草や木々を生じさせたり支えたりするように、俱生有縁、前生有縁、後生有縁、食有縁、根有縁などの五有縁と関係する名・色法へ縁所生に有るといふことで生じさせたり支えたりする縁。
22. 非有縁 natthi paccayo 日が沈むと月が輝くように、前の心、心所、名法などが無くなること、存在しないことによつて心、心所、名法などを生じさせる縁。(令生縁)
23. 離去縁 vigata paccayo 夜が明けると朝焼けが始まるように、前の心、心所、名法などが滅すること、離れることによつて心、心所、名法などを生じさせる縁。(令生縁)
24. 不離去縁 avigata paccayo 大海の塩水がそこに住む生命から離れ去らないことによつて生じさせたり支えたりするように、俱生不離去縁、前生不離去縁、後生不離去縁、食不離去縁、根不離去縁などの五不離去縁と関係する名・色法へ縁所生に離れ去らないといふことで生じさせたり支えたりする縁。

§15 6種の縁

縁が縁所生へ

名が名へ6縁、名が名色へ5縁、色が名へ1縁、名が色へ1縁、施設、名、色が名色へ2縁

名色が名色へ9縁

§23 縁の略 所縁縁・親依縁・業縁・有縁の中にすべての24縁は収まる

俱生縁類 s15 【有縁】		
俱生縁、依縁、 有縁、不離去縁	相互縁、異熟縁、 相応縁、不相応縁	因縁、俱生主縁、俱生業縁、俱生食縁、俱生根縁、禪縁、道縁、
所縁縁類 a8 【所縁縁】		
所縁縁、所縁主縁、所縁親依縁、所縁前生縁、基所縁前生依縁、基所縁前生依不相応縁、所縁前生有縁、所縁前生不離去縁		
無間縁類 n7 【親依縁】 無間縁、極無間縁、無間親依縁、習行縁、非有縁、離去縁、無間業縁		
自然親依縁類 【業縁】 ①後生の心心所に働きかける前生の強力な心心所・色・施設である自然親依縁 ②道思を除いた異熟名蘊に働きかける強力な業である自然親依各刹那業縁		
基前生縁類 p6 【有縁】 基前生縁、基前生依縁、基前生不相応縁、基前生根縁、基前生有縁、基前生不離去縁		
後生縁類 j4 【有縁】 後生縁、後生不相応縁、後生有縁、後生不離去縁		
食縁類 h3 【有縁】 色食縁、色食有縁、色食不離去縁		
根縁類 i3 【有縁】 色命根縁、色命根有縁、色命根不離去縁		
各刹那業縁類 欲界異熟に働きかける非力な業縁、自然親依縁に含まれ、大、出世間業は強力な業のみで自然親依縁と無間縁類にそれぞれ含まれる。自然親依縁所生は業生色が入らないので、その色を生じさせる業縁は力にかかわらず各刹那業縁のみ。業生色に働きかける強力・非力の業縁の一種		

表 1	名前	縁	縁所生
⑥ 名 ⇒名	無間縁(4)n	阿羅漢の死心を除く 89 心、52 心所	阿羅漢の死心を含む 89 心、52 心所
	極無間縁(5)n		
	非有縁(22)n		
	離去縁(23)n		
	習行(12)n	同性の最後の速行を除いた、前になる世間速行心 47、52 心所	初速行、果速行を除いた、後に生じる 51 速行心、52 心所
	相応(19)s	お互いに働きかける、あらゆる 89 心、52 心所である生起、結生の名蘊 4	これらは相互に相応縁所生
⑤ 名 ⇒ 名色	因縁(1)s	貪、瞋、痴、無貪、無瞋、無痴の六因	71 有因心、痴根心 2 の中の痴心所を除く 52 心所 有因心生色、有因結生業生色
	禪縁(17)s	尋、伺、喜、受、一境性の五禪支	二つの前五識を除いた 79 心、52 心所、心生色、結生業生色
	道縁(18)s	慧、尋、正語、正業、正命、精進、念、一境性、見 <i>ditṭhi</i> である道支 9	71 有因心、52 心所 有因心生色、有因結生業生色
	俱生業縁(13)s	89 心にある 89 の思心所	89 心、思を除いた 51 心所、心生色、結生の業生色
	各刹那業縁 k (一部 4 道思 n)	過去の善、不善の思 33 (12+17+4)	36 異熟心、38 心所、 結生業生色、無想有情業生色、 生起業生色
	異熟縁(14)s	名蘊、心生色、結生業生色に力を及ぼす 36 異熟心、38 心所である生起、結生異熟名蘊 4、これらはお互いに異熟縁	36 異熟心、38 心所である名蘊、その名蘊によって適宜に生じる 2 表色を除いた心生色、結生業生色、これらはお互いに異熟縁所生
① 名 ⇒色	後生縁(11)j 後生不相応縁 j 後生有縁 j 後生不離去縁 j	五蘊地において (無色異熟心 4 を除く) 初有分を含む、後に生じた 85 心、52 心所	結生心を始めとする、前の心と同時に生起した色の住に達した一起因色、二起因色、三起因色、四起因色
① 色 ⇒名	基前生縁 p 基前生有縁 p 基前生不離去縁 p	基前生依縁(8)と同じ 色⇒名 六基色	五蘊地において (4 無色異熟心を除く) 七識界 85 心、52 心所
	所縁前生縁(10)a 所縁前生有縁 a 所縁前生不離去縁 a	五所縁 (色、声、香、味、地・火・風) 現在の完色 18 (発趣論によると)	五蘊地において所縁前生縁を常に (二つの五識、意界)、あるいは時によって所縁とする 残りの欲界心 41、 神変 2、無量を除いた心所 50



表 2	名前	縁	縁所生
② 施設 名色 ⇒ 名	所縁縁(2)a	現在、過去、未来の 89 心、52 心所、 28 色、離時の涅槃、施設	89 心、52 心所
	所縁親依縁 a	所縁主縁と同じ 極めて好ましい所縁	これを所縁とする心心所
	無間親依縁 n	無間縁と同じ（特に強く働く場合）	
	自然親依縁(9)	強い拠所となる現在、過去、未来の 89 心、 52 心所、28 色、縁になり得る施設	現在の 89 心、52 心所
⑨ 名色 ⇒ 名色	所縁主縁(3)a 名・色 ⇒名 名色	重んじられる好所縁である完色 18 2 瞋根心、2 痴根心、苦受身識を除く 84 心 瞋、嫉、慳、悪作、疑を除く 47 心所、 涅槃	重んじる側の 8 貪根心、8 大善心、4 大唯作智 相応心、8 出世間心、 瞋、嫉、慳、悪作、疑、2 無量を除く 45 心所、
	俱生主縁 s 名⇒名色	2 痴根心、笑起心を除いた、主となる 52 速行に相応する意欲、精進、 34 三因速行にある観察 主となる 52 速行といわれる心 意欲、精進、心、観察の中のどれか一つ	主縁を得たとき主となる俱生主自性を除いた 主となる 52 速行、疑を除く 51 心所、俱生心 生色
	俱生縁(6)s	①89 心、52 心所は相互に、  ②四大種である心生、結生業生、外、食生、 時節生、無想有情業生、生起業生が相互に、 ③五蘊地における結生異熟名蘊と心基色 は相互に 結生心は	①89 心、52 心所は相互に、及び心生色、結生 業生色 ②すべての四大種は相互に、及び依止色 ③五蘊地における結生異熟名蘊と心基色は相 互に、 心基を除く業生色へ
	相互縁(7)s 名色⇔名色	①89 心、52 心所、生起、結生四名蘊 ②四大種 ③五蘊地における結生異熟名蘊と心基色	①89 心、52 心所、生起、結生四名蘊 ②四大種 ③五蘊地における結生異熟名蘊と心基色
	俱生依縁 s	俱生縁(6)と同じ	
	基前生依縁(8)p 色⇒名	中寿の過去有分と同時に生起した五基色 結生心などの前の心と同時に生起する心 基色、滅定の最後の一心刹那前頃に生じた 心基色、死心より前の 17 心刹那目の心と 同時に生じる六基	五蘊地において 4 無色異熟心を除く七識 85 心、52 心所
	基所縁前生依縁 a 色⇒名 基前生不相応 p4	臨終時における死心前 17 心刹那目の心と 同時に起こる心基色	臨終時における意門引転心、29 欲界速行、11 彼所縁、 嫉、慳、悪作、3 離、2 無量を除く 44 心所、

表 3	名前	縁	縁所生
⑨ 名色 ⇒ 名色	色 <b>食縁</b> (15)h 食有縁 h 食不離去縁 h 色⇒色	段食と称される外の滋養素 四起因滋養色	この身体 滋養素を除く同じ色聚四起因色
	名 <b>食縁</b> s 名⇒名色	触、思、識と言われる名食	受心所、89識、名・色 (89心、52心所、心生色、結生業生色)
	基前生 <b>根縁</b> (16)p 色⇒名	中寿の過去有分と同時に生起した五基	2つの五識、共一切心心所7
	色命 <b>根縁</b> i 根有縁 i 根不離去縁 i	色命根色 色⇒色	色命根色を除く色聚が同じ業生色9
	俱生 <b>根縁</b> s 名⇒名色	心、名命根、受、信、精進、念、一境性、 慧の8名根	89心、52心所、心生色、結生業生色
	俱生 <b>不相応縁</b> (20) s	五蘊界において4無色異熟、2つの五識、 阿羅漢の死心を除く75心、 52心所、生起・結生名蘊4、 五蘊界における結生名蘊と心基はお互い に	心生色、結生業生色  五蘊界における結生名蘊と心基はお互いに
	基所縁前生 <b>不相応縁</b> a	基前生依縁(8)、基所縁前生依縁と同じ	
	後生 <b>不相応縁</b>	後生縁(11)と同じ	
	俱生 <b>有縁</b> (21)s 俱生不離縁 s	3種の <b>俱生縁</b> と同じ	
	不離去縁(24)s	有縁と同じ	

過去一時は5縁

無間縁(4)、極無間縁(5)、非有縁(22)、離去縁(23)、習行(12)

現在、過去、二時は一縁

業縁(俱生業縁、各刹那業縁)

三時、又は離時は3縁

所縁縁、主縁、親依縁

現在一時は15縁

上記以外

無為、有為の2縁

所縁縁、主縁、親依縁 残り是有為のみ

外と内は10縁

所縁縁、主縁、俱生縁、相互縁、依縁、親依縁、前生縁、食縁、有縁、不離去縁 残り内

a.三時：心、心所、色

b.離時：涅槃、施設

c.内：心、心所、色

d.外：心、心所、色、涅槃

e.有為：心、心所、色

f.無為：涅槃

## 十二縁起を二十四縁による詳説

無明により行 (29 思)

### 善行 8+5 ・ 不動行 4

無明の生滅などを観察する欲界善心、他心智などの神通で自他の無明を知る色界善心 / 所縁縁

無明を乗り越えるため (涅槃を得るため) 布施などの欲界善業、色界業を行う / 親依縁

無明によって輪廻の苦を見ないので生天のために欲界善、色界善、不動行 (無色界善) を行う / 親依縁

### 不善行 12

無明を所縁として欲が生じる / 所縁縁、所縁主縁、所縁親依縁

非を見ないで殺生などをする / 親依縁

第二速行心などへ / 間、極、習、非有、去、

特に気にせず不善を行った場合 / 因、俱、互、依、相、有、不離

行より識 (32 世間異熟心) / 各刹那業縁、自然親依縁

欲界善行より無因善異熟心 8、大異熟心 8、色界善行より色界異熟心 5

無色界善行より無色界異熟心 4

不善行より不善異熟心 7

識により名色 (名 : 異熟心と相応する心所 色 : 業生色)

異熟識 → 相応名へ / 俱、互、依、相、異、食、根、有、不離 9

結生異熟識 → 基色へ / 俱、互、依、異、食、根、有、不離 8

異熟識 → 他の色へ / 俱、依、異、相、食、根、有、不離 8

行識 *abhisaṅkhāravīññāṇa* → 無想有情 (業生色) へ / 親

異熟識と行識以外の有分などの識へ → それぞれの名・色へ適宜に

## 名色より六処

### 四蘊界

結生異熟名 → 意処 / 俱、互、依、相、異、有、不離、7

生起異熟名 → 意処 / 俱、互、依、相、異、有、不離、(因)、(食)、7~8

生起非異熟名 → 意処 / 俱、互、依、相、有、不離、6~7

### 五蘊界

名 結生異熟名 → 意処 / 俱、互、依、相、異、有、不離、7

→ 五処 / 俱、不相、依、異、有、不離、6

生起異熟名 → 意処 / 俱、互、依、相、異、有、不離、7

生起非異熟名 → 意処 / 俱、互、依、相、有、不離、6

生起異熟名 (生起時非異熟名) → 五処 / 後、不相、有、不離、4

色 結生心基 → 意処 / 俱、互、依、不相、有、不離、6

結・起、四大種 → 五処 / 俱、依、有、不離、4

結・起、色命根（起、色食）→五処 /根、（食）、有、不離、3

起、色食→五処 /食、有、不離、3

起、五処→二つの五識という意処へ /依、前、根、不相、有、不離、6

起、心基→二つの五識以外の意処へ /依、前、不相、有、不離、5

**名色** 結生時に三名蘊と心基は意処へ/俱、互、依、異、相、不相、有、不離、8

### 六処より触

内色五処→五触へ/依、前、根、不相、有、不離、6

意処→意触へ/俱、互、依、異、食、根、相、有、不離、9

外五処→五触へ/所、前、有、不離、4

外五処→意触へ/所、前、有、不離、4

法処→意触へ/所、前、有、不離、4

### 触より受

眼触、耳触、鼻触、舌触、身触、意触（世間異熟心22に相応する触）

眼触などの五→眼触所生受など五 /俱、互、依、異、食、相、有、不離、8

眼触などの五→残りの意触所生受 /自然親依縁

意触→意門欲界異熟彼所縁の受へ/俱、互、依、異、食、相、有、不離、8

意触→三界の結・有・死の受へ/俱、互、依、異、食、相、有、不離、8

意門引転心の触→意門欲界異熟彼所縁の受へ /自然親依縁

### 受より渴愛

色愛、声愛、香愛、味愛、触愛、法愛（貪根心と相応する貪心所）

異熟楽受→渴愛 /自然親依縁

### 渴愛より固執（欲、我説、習性行、見）

渴愛→欲固執 /親、/俱、互、依、相、有、不離、因7

/渴愛→残りの固執 /俱、互、依、相、有、不離、因、（親依縁が入るときは俱生縁はなし）8

### 固執より有

固執→色有・無色有へ /自然親依縁

固執→欲界善業、起有へ /自然親依縁

固執→固執と共に生じる不善業有 /俱、互、依、相、有、不離、因、7

固執→固執と共に生じない不善業有 /自然親依縁

### 有より生

/各刹那業縁、自然親依縁

### 生より老、死、愁、悲泣、苦、憂、惱

/自然親依縁

## §27 施設の別 paññatti bheda

第一義（勝義）諦でなく世間において共通認識として認められた法を施設と呼ぶ

二種の施設

義施設（attha-paññatti）例：第一義諦から見ると人、天、畜生などは存在せず名色が生滅しているだけといえるが、世俗諦から見ると存在すると言って良い、人、天、畜生など名前ではなくその指し示されるもの又は概念など。

声施設（sadda-paññatti）義施設の呼び名、呼ぶことによって知らせる声・音（名施設と同じ）

心、心所、色、涅槃そのものは第一義に存在するが、それを知らせる声・音は施設である

義施設

接合施設	santāna-	四大種の集まりである大地、山、樹、河、海など
積聚施設	samūha-	木材なので種々の素材が集まることによって成り立っている家、牛車、机、椅子など
有情施設	satta-	五蘊の集まりを人、男、女、四蘊：無色界梵天、一蘊：無想有情天
方位	disā-	北という方角を決めることによって他の方角も概念化されたもの
時施設	kāla-	地球の自転や公転によって一日、一年などと概念化しているもの
虚空施設	ākāsa-	洞窟などの空間、周りの岩などによって成り立つ
遍施設	kaṣiṇa-	地遍などの大種に基づいて概念化されたもの、第一義の地界ではない
相施設	nimitta-	修習の順によって生じる遍作相、取相、似相など

上記以外に

第三無識禪の所縁である無有体施設 natthi bhāva-、色界禪の所縁である安般施設 ānapāna-、青遍、黄色遍などの色遍施設、第一義法によって名づけられる依止施設 upādā-、長に対する短など比較施設 upanidhā-

声施設

存在施設	色・声・香・味・触・法など第一義の呼び名である施設
非存在施設	山・川 世俗諦の呼び名である施設
存在非存在施設	六神通者 六神通は第一義に存在するが者である人は世俗諦であるので
非存在存在施設	女の声 女は世俗諦であるが声は第一義に存在するので
存在存在施設	眼浄色 眼も浄色も第一義に存在するので
非存在非存在施設	王子 王も子も共に世俗諦であるので

## §30 施設の識別

- 1.go（牛）という音を聞くとき声所縁（現在、第一義）に対して耳門路が生じ、
- 2.その声所縁（過去、第一義）に対して彼随生意門路 tadanuvattika-manodvāra vīthi が生じる。
- 3.名施設を所縁として名称把握意門路 nāmaggaḥaṇa-が生じ意味が分かる。
- 4.その名施設を所縁として義施設把握意門路 atthapaññatti ggahaṇa-が生じ牛の形などがイメージとして分かる。

二音節以上は

- 1.2.+1.2.・・・と増えていき、★統合把握意門路 samūha ggahaṇa-が二音節以上の名施設を所縁として統合する路が生じ、その後、3.4.と路が続く。

## IX 摂業処分別 **Kammaṭṭhāna saṅgaha vibhāga**

業処 **kammaṭṭhāna** とは止修習 **samatha bhāvanā** と観修習 **vipassanā bhāvanā**の所縁（瞑想対象）

止業処 **samatha kammaṭṭhāna**

（集中力、禅定を得るために）蓋（瞑想の障害）が静まるように実践する瞑想の所縁（40種）

止修習 **samatha bhāvanā** 上記を所縁とした瞑想実践

観業処 **vipassanā kammaṭṭhāna**

（道・果を得るために）名色の無常、苦、無我などの相を所縁とする

観修習 **vipassanā bhāvanā** 上記を所縁とした瞑想実践

遍作修習 40

全ての瞑想の基礎となる修習、実際に土遍を目で見ている所縁を遍作相 **parikamma nimitta**、目を閉じていても意識上にイメージが現れる所縁を取相 **uggaha-nimitta**。

近行修習 10

取相を何度も繰り返し集中していくとさらに澄み切った似相 **paṭibhāga-nimitta** が現れた段階で安止の近くという意味で近行修習という。

安止修習 30

さらに似相に集中し続けると禅定の段階である安止修習となる。

### 【止修習 40種】

遍 10 **kaṣiṇa**（第五禅まで）

地遍 **pathavī-** 業処を修習するための土で作った直径 30cm ぐらいの円形の地を遍という、それに続いて生じる取相、似相もこれに基づくので地遍取相などと呼ぶ。以下同様に知るべきである。

水遍 **āpo-**、火遍 **tejo-**、風遍 **vāyo-**

青遍 **nīla-**、黄遍 **pīta-**、赤遍 **lohita-**、白遍 **odāta-**、

虚空遍 **ākāsa-**、光明遍 **āloka-**（この二つは経蔵に含まれていない）

不浄 10 **asubha**（初禅まで）

膨張屍 **uddhumātaka** 死後、数日を経て膨張した厭わしい屍体。

雑青屍 **vinīlaka** 白・赤などの色が雑ざった青黒く変色した厭わしい屍体。

漏膿屍 **vipubbaka** 身体の各所の破れた所から膿が漏れ出している厭わしい屍体。

切断屍 **vicchiddaka** 二つに切断された厭わしい屍体。

食残屍 **vikkhāyitaka** 犬や秃鷹などがあちこち種々の形で食い散らした厭わしい屍体。

散乱屍 **vikkhittaka** 手・足・頭などがあちこち散乱した厭わしい屍体。

斬刻散乱屍 **hatavikkhittaka** 五体が別々に切り刻まれてあちこち投げ捨てられた厭わしい屍体。

血塗屍 **lohitaka** 流れ出た血で塗られた厭わしい屍体。

蛆充満屍 **puḷuvaka** 蛆虫が全体に充満している厭わしい屍体。

骸骨屍 **aṭṭhika** 厭わしい骨となった屍体。

### 随念 10 anussati (近行修習、随念 8+想 1+差別 1)

- 仏随念 buddhānussati 阿羅漢などの仏徳を所縁として繰り返し念じること。
- 法随念 dhammānussati 教法、道、果、涅槃の法の徳を所縁として繰り返し念じること。
- 僧随念 saṅghānussati 聖サンガの徳を所縁として繰り返し念じること。
- 戒随念 sīlānussati 自己の戒徳を所縁として繰り返し念じること。
- 捨随念 cāgānussati 自己の布施の徳を所縁として繰り返し念じること。
- 天随念 devatānussati 「信によって功徳を積み諸天となった同じ信を私も持っている」などと自己の徳を所縁として繰り返し念じること。
- 寂止随念 upasamānussati 一切苦の寂滅である涅槃の徳を所縁として繰り返し念じること。
- 死随念 maraṇānussati 自分も確実に死に行くものだということを所縁として繰り返し念じること。
- 身起念 kāyagatāsati (初) 髪の毛などの 32 の身分を所縁として繰り返し念じること。
- 出入息随念 ānāpānassati (五) 出息、入息を所縁として繰り返し念じること。

### 無量 4 appamāṇā (捨以外は第四禪まで)

- 慈 mettā 無量の慈しみを受ける有情施設を所縁とし、慈しんで楽を与えたいという心を起し集中することで自性は無瞋心所である。
- 悲 karuṇā 無量の苦しんでいる有情施設を所縁としてあわれみの心を起し集中すること。
- 喜 muditā 無量の幸せな有情施設を所縁としてよろこびの心を起し集中すること。
- 捨 upekkhā 無量の苦でも楽でもない有情施設を所縁として「一切の有情は業を自己とする」と捨の心を起し集中すること。(慈など修習によって第四禪まで達し、捨によって第五禪に入定できる)

### 想 1 saññā

- 食厭想 āhāre paṭikūla- 食事に伴う行乞などの煩わしさを観察すれば食に対する厭想が生じる、食物が所縁業処。(近行修習)

### 差別 1 vavatthāna

- 四界差別 catu dhātu- この身体を地、水、火、風の四大要素で観察する知、四界が所縁業処 (近行修習)

### 無色 4 āruppa

- 空施設所縁、初無色識所縁、無所有施設所縁、第三無色識所縁 (1~4 無色禪)

### §3 性 6

- 貪性 渴愛、貪などが生じやすい気質
- 瞋性 瞋恚が生じやすい気質
- 痴性 無知が生じやすい気質
- 尋性 考え事が多く落ち着かない気質
- 信性 信が生じやすい気質
- 覺性 知恵が生じやすく、批判的な気質

§13 性による業処の分別

業処 40 種	貪性	瞋尋性	痴・尋	信性	覺性	計
不浄 10、身起念 1=11	*					1
無量 4、青遍、黄遍、赤遍、白遍=8		*				1
出入息観 1			*			2
仏随念、法随念、僧随念、戒随念、捨随念、天随念=6				*		1
寂止随念、死随念、食厭想、四界差別=4					*	1
地遍、水遍、火遍、風遍、虚空遍、光明遍、無色 4=10	*	*	*	*	*	6
業処計	21	18	11	16	14	

§14 修習による業処の区別

遍作相、取相の違いなど区別が難しく便宜的に説かれたものもある

遍作修習 40	全ての修習	遍作相・取相
近行修習 10 まで	随念 8、想 1、差別 1	似相
安初禅まで	不浄 10、身起念 1	
止第 2 禅～第 4 禅まで	慈 1、悲 1、喜 1、	
修第 5 禅まで	遍 10、捨 1 (第 5 のみ)、出入息 1	
習無色界禅のみ	それぞれの無色 4	
30		

第一義業処： 随念 8、想 1、差別 1、第二無色、第四無色

施設業処： 遍 10、不浄 10、身起念 1、出入息 1、無量 4、初無色、第三無色

§18 色界禅の生起

自在 5 *vasībhāva* 初禅を得たものはさらに高い禅定を得るために五自在を得ないといけない。

引転自在 *āvajjana-* 出定した後直ぐに引転を自在に起し観察路を生じさせる

入定自在 *samāpajjana-* 入定したい意欲が生じると直ぐに禅定に入れる

在定自在 *adhittāna-* 自分の望むとおりの時間禅定にとどまることが出来る

出定自在 *vuṭṭhāna-* 自分の定めた時間どおりに出定することが出来る

観察自在 *paccavekkhaṇa-* 引転が自在になれば観察自在も得られる



## §20 神通の生起 abhiññā pavattana

第五禪定の定力が強くなって明瞭になると、これに相応している慧が神通の段階に達する。この神通を得るには過去生の徳があれば道や第五禪に達するだけで得られる場合があるが、それ以外は一切の遍を所縁として九禪定に自在になった上で訓練しないと神通は得られない。

## §21 神通 5

神通 iddhividha 多身・一身などを化作すること。百となろう、千となろう、などと遍作する。

天耳通 divasota 諸天の耳のように、遠い声、小さい声を聞くことができる。

他心通 paracittavijānanā(ceto pariyāya) 他人の心を知ることができる

宿住随念智 pubbenivāsānussati 過去世の出来事を思い出すことができる

天眼通 divacakkhu 天人の目のように遠い所や微細な色を見ることが出来る

## 5. 観業処の仕方

### §22 清浄 7

戒清浄、心清浄、見清浄、度疑清浄、道非道智見清浄、行道智見清浄、智見清浄

### §23 特相 3 lakkhaṇa

無常相 anicca-、苦相 dukkha-、無我相 anatta-の三相である。

### §24 随観 3 anupassanā

無常随観 aniccānupassanā、苦随観 dukkhānupassanā、無我随観 anattānupassanāの三随観である。

### §25 観智 10 vipassanā ñāṇa

思惟智 sammasana-、生滅智 udayabbaya-、壊滅智 bhaṅga-、怖畏智 bhaya-、過患智 ādinava、厭離智 nibbidā-、脱欲智 muccitukamyatā-、省察智 paṭisaṅkhā-、行捨智 saṅkhārupekkhā、随順智 anuloma-

### §26 解脱 3 vimokkha

空解脱 suññato-、無相解脱 animitto-、無願解脱 appaṇihito-

### §26 解脱門 3 vimokkha mukha

空随観 suññatānupassanā、無相随観 animittānupassanā、無願随観 appaṇihitānupassanā

## 1 戒清浄 **sīla visuddhi** (四清浄戒)

守持者を解脱させる防護という戒 **pātimokka saṃvara sīla**

比丘 227 戒を信を持って守ること、在家は五戒を守る。

根の防護という戒 **indriya saṃvara sīla**

眼、耳、鼻、舌、身、意の六門に不善心が生じないように念を持って守る。

生活の清浄という戒 **ājīva parisuddhi sīla**

戒律に違反する方法で生活せず、精進を持って托鉢などを行い生活する

資具に依止という戒 **paccaya sannissita sīla**

戒律に従った方法で得た托鉢食、衣、住居、薬を知恵を持って使用する。

## 2 心清浄 **citta visuddhi**

止行者の方法 **samatha yānika naya** : 近行定、安止定の二種

観行者の方法 **vipassanā yānika naya** : 瞬間定 ヴィパッサナーによって五蓋から離れる

## 3 見清浄 **diṭṭhi visuddhi**

名色分離智 **nāma rūpa pariccheda ñāṇa** 特相、作用、現状、直接原因による名色の把握

人、有情、私、他人、男、女、我などが実在するという邪見を取り除くため名・色の法を特相などによって瞑想する。

## 4 度疑清浄 **kaṅkhāvitaraṇa visuddhi**

縁摂受智 **paccaya pariggaha ñāṇa** その名色の縁の把握によって過去5、未来5、現在6の16種の疑惑や仏法僧などに対する8種の疑惑などを取り除く。

## 八種の疑

①仏、②法、③僧、④三学(戒、定、慧)、⑤過去、⑥未来、⑦過去と未来、⑧縁起の教え

## 十六種類の疑

過去時

1. 真我、魂、私は過去に生じたのか?
2. 真我、魂、私は生じなかったか? (生じなかったのだろう)
3. 過去にどのような生だったか? (王、大臣など)
4. 過去にどのような容姿だったか? (痩せている、太っているなど)
5. 過去にどのような生であったか、その後どのようになったか? (王の後、長者になった)

未来時

1. 真我、魂などは将来生じるのか？（永遠論）
2. 真我、魂などは将来生じないのか？（断滅論）
3. どのようになるのか？（王、大臣など）
4. どのような容姿になるのか？（痩せている、太っているなど）
5. どのような生から、どのようになるのか？（王、大臣の生から神など）

現在時

1. 真我、魂、私は本当にあるのか？
2. 真我、魂、私は無いのか？
3. どのような生か？（王、大臣など）
4. どのような容姿か？（痩せている、太っているなど）
5. 私はどのような生から来たか？
6. この生が終わって、どのような生になるか？

### 5 道非道智見清淨 **maggāmagga ñāṇadassana visuddhi**

- ①思惟智 **sammasana ñāṇa** 名色を無常、苦、無我と思惟する智慧
- ②生滅智 **udayabbaya ñāṇa** 名色の生滅を明瞭に随観する智慧

観の染汚 **vipassanā upakkilesa**

光明 **obhāsa** 身体から光が発する 心生色

喜 **pīti** 五種類の喜 喜心所

小喜	<b>Khuddikā pīti</b>	鳥肌が立つように小さく生じる喜
刹那喜	<b>Khaṇikā pīti</b>	稲妻が光るように瞬間に生じる喜
断起喜	<b>Okkantikā pīti</b>	大波が打ち寄せるように広がる喜
踊躍喜	<b>Ubbegā pīti</b>	自然と身体が浮き上がるような喜
遍満喜	<b>Pharaṇā pīti</b>	全身に長く染みわたるような喜

軽安 **passadhi** 心身が極めて安穩になる。身軽安（色）、心軽安（心所）

確信 **adhimokkha** 観の修行に確信する。信心所

策励 **paggaha** 観から後退しないように精進する。精進心所

樂 **sukha** 観によって樂住する。受心所

智 **ñāṇa** 電光のように速く鋭い智慧が生じ、名色の生滅を明瞭に観察できる。慧根

安住 **upaṭṭhāna** 瞑想にしっかり安住させる。念心所

捨 **upekkhā** 特に努力することなく明瞭に随観できる。（中捨）

生滅を観察するとき速やかに引転心を生じさせることができる引転心と相応する思心所（引転捨）

微欲 **nikanti** 以上の法に対して微かに執着するので貪と分らない。

この法を悟りと間違えてしまうと非道となり、それに執着せずに実践していくことが正道である。

生滅智 **udayabbaya ñāṇa** の前半 観の染汚が生じた段階が前半、執着せずに正しく実践すると後半

6 行道智見清淨 **paṭipadā ñāṇadassana visuddhi** 生滅智 udayabhaya ñāṇa の後半

- ③壊滅智 bhaṅga ñāṇa 壊滅のみを觀察する智慧。
- ④怖畏智 bhaya ñāṇa 名色を畏怖すべきものと觀察する智慧。
- ⑤過患智 ādīnava ñāṇa 諸行の過患を見る智慧。
- ⑥厭離智 nibbidā ñāṇa 諸行を厭う智慧。
- ⑦脱欲智 muccitukamyatā ñāṇa 諸行から脱したいという智慧。
- ⑧省察智 paṭisaṅkhā ñāṇa 諸行を再び、無常、苦、無我と隨觀する智慧。
- ⑨行捨智 saṅkhārupekkhā ñāṇa 平静に觀察する智慧。
- ⑩隨順智 anuloma ñāṇa 八觀智と對立することなく隨順する智慧。

出起に至る觀 vuṭṭhāna gāminī vipassanā (頂点に達した行捨智、隨順智) ⇒ 種姓智 gotrabhu ñāṇa (清淨に属さない)

7 智見清淨 **ñāṇadassana visuddhi** 道智 magga ñāṇa 隨眠煩惱を取り除く、弱める

道智の四作用

1. 遍知作用 Pariññā kicca 苦聖諦を知る
2. 捨断作用 Pahāna kicca 集聖諦(貪)を取り除く
3. 作証作用 Sacchikaraṇa kicca 滅聖諦に達する、涅槃を實現する
4. 修習作用 Bhāvanā kicca 道聖諦を實踐する

果智 phala ñāṇa 悟りを味わう

觀察智 19 paccavekkhaṇā ñāṇa

- 5 預流道、預流果、涅槃、捨断した煩惱、残っている煩惱を觀察する知恵
- 5 一來道、一來果、涅槃、捨断した煩惱、残っている煩惱を觀察する知恵
- 5 不還道、不還果、涅槃、捨断した煩惱、残っている煩惱を觀察する知恵
- 4 阿羅漢道、阿羅漢果、涅槃、捨断した煩惱 (阿羅漢は煩惱が残り無いので觀察智は 19)

§39 解脱の別

三特相	三解脱門	三解脱
無常相 <i>aniccalakkhaṇā</i>	無常随観 <i>aniccānupassanā</i>	無相解脱 <i>animittavimokkha</i>
苦相 <i>dukkhalakkhaṇā</i>	苦随観 <i>dukkhānupassanā</i>	無願解脱 <i>appaṇihitavimokkha</i>
無我相 <i>anattalakkhaṇā</i>	無我随観 <i>anttānupassanā</i>	空解脱 <i>suññatavimokkha</i>

§40 人の別

**預流** 悪見相応心 4、疑相応痴根心 1 を完全に取り除き、悪趣に転生させるような不善心も生じない

1. 極七返者 *Sattakkhattuparamasotāpanna* 七生目で涅槃に入る預流者
2. 家家者 *kolaṃkolasotāpanna* 次生から六生目までのあいだに涅槃に入る預流者
3. 一種者 *ekabījīsotāpanna* 一度だけ転生した後、涅槃に入る預流者

**一来** 残りの煩惱が更に弱くなる

1. *Idha patvā idha parinibbāyī* この人間界で一来果となり、この人間界で涅槃に入る一来
2. *Idha patvā tattha parinibbāyī* この人間界で一来果となり、天界にて涅槃に入る一来
3. *Tattha patvā tattha parinibbāyī* その天界で一来果となり、その天界で涅槃に入る一来
4. *Tattha patvā idha parinibbāyī* その天界で一来果となり、この人間界で涅槃に入る一来
5. *Idha patvā tattha nibbattivā idha parinibbāyī*  
この人間界で一来果となり、その天界に生まれ、この人間界で涅槃に入る一来
6. *Tattha patvā idha nibbattivā tattha parinibbāyī*  
その天界で一来果となり、この人間界に生まれ、その天界で涅槃に入る一来

**不還** 瞋根心 2 *vyāpāda*、欲貪 *kāmarāga* を取り除く

1. *Antarāparinibbāyī anāgāmi* 転生した浄居天の寿命の前半までに阿羅漢になる不還
2. *Upahaccaparinibbāyī* 転生した浄居天の寿命の後半以降に阿羅漢になる不還
3. *asaṅkhāraparinibbāyī* それほど苦勞しないで涅槃に入る不還
4. *sasaṅkhāraparinibbāyī* 苦勞しながら精進努力し涅槃に入る不還
5. *uddhaṃsota akaniṭṭhagāmi* 不捨天から浄居天を無劣天まで生まれ変わっていく  
*uddhaṃsota na akaniṭṭhagāmi* 不捨天から浄居天を善見天まで生まれ変わっていく  
*na uddhaṃsota akaniṭṭhagāmi* この欲界から無劣天で生まれ涅槃に入る  
*na uddhaṃsota na akaniṭṭhagāmi* この欲界から浄居天下四界に生まれそこで涅槃に入る

**阿羅漢** 阿羅漢道は悪見不相応心 4 と掉挙相応痴根心 1 を完全に取り除く

その他の用語

慧解脱 *Paññāvimutti* 俱分解脱 *Ubhatobhāgavimutti*

漏尽智、無碍解以外は凡夫でも生じる可能性あり

三明 Tevijja 宿住随念智 pubbenivāsānussati 天眼智 dibbacakkhu 漏尽智 āsavakkhaya

六神通 chaḷābhiññā 天耳通 dibbasota、他心通 paracittavijānanā(ceto pariyāya)、神足通 iddhividha、  
天眼通、宿住随念智、漏尽通

無碍解 paṭisambhidāpatta 義 attha-、法 dhamma-、詩 Nirutti-、弁 paṭibhāna-

### 四道心によって取り除かれる不善法

預流道にて①と悪趣に転生するような不善法を取り除く

一來道にて残りの粗い不善法が生じなくなる

不還道にて②を取り除く

阿羅漢道にて残り③全ての不善法を取り除く

	①預流道	②不還道	③阿羅漢道
結 10 経による samyojana	有身見、疑、戒禁取見	欲貪、瞋恚	慢、色貪、無色貪、掉挙、無明
煩惱 10 kilesā	見、疑、	瞋、	貪、無明、慢、昏沈、掉挙、無慚、無愧
邪性 15 micchatta	邪見、殺生、偷盜、邪淫、妄語、邪命	邪思惟、離間語、僞惡語、	綺語、邪精進、邪念、邪定、邪解脱、邪智
世間八法 8 lokadhamma		不利得、不名誉、苦、非難	利得、名誉、楽、賞賛
慳 5 macchariya	住慳、家慳、利得慳、称赞慳、法慳		
顛倒 12 vipallāsa	無常を常、無我を我とする相顛倒、心顛倒、 見顛倒、苦を楽、不浄を浄とする見顛倒 8	不浄を浄とする相顛倒、 心顛倒 2	苦を楽とする相顛倒、心顛倒 2
繫 4 gantha	戒禁取見身、比実住著身	瞋恚身、byāpāda	貪欲身、abhijjhākāya
不行処 4 agati	欲 chanda、瞋、痴、怖畏 bhaya		
漏 āsava、暴流 ogha、 輓 yoga	見	欲 kāma	有、無明、
蓋 6 nīvaraṇa	疑、粗い悪作	欲貪、瞋恚、残りの悪作	昏沈、睡眠、掉挙、無明
取著 parāmāsa	見取著		
固執 4 upādāna	見、戒禁取見、我語取		欲の固執
随眠 6 anusaya	見、疑、	欲貪 kāmarāga、瞋恚、paṭigha	慢、有貪、無明
根 3 mūla		瞋	貪、痴
不善業道 10 akusalakammamāpatha	殺生、偷盜、邪欲行、妄語、邪見	離間語、僞惡語、瞋恚、	綺語、貪欲
不善心生起 Akusalacittupāda	悪見相応貪根心 4、疑相応痴根心 1	瞋根心 2	悪見不相応貪根心 4、掉挙相応痴根心 1